第百四、體育＝衛生即ち身體を清潔にするの術、體操即ち身體を強健ならしむる術の如きは兩からラベライスの同一樣に注意する所なりエラスマスの如きは一日に二度沐浴するは無益なりと稱したれども之に反しガルガンタの如きは食事を終る毎に清水を以て其手と目とを洗ひたりラベライスは敎師たる者は一個の醫者たるべき事を忘れずーて能く身體に注意し其甚だ嫌惡すべき部分と雖ども決して忽せにせざるなり中世の人人は秘密主義を奉じ身體と心意と毫も關係なしと信じ其身體は如何に之を放棄するも毫も智力に關係なく又尊ぶべき精神を不能にする者にあらずと信じたれどもラベライスの如きは決して然らざるなりガルガンタの最初の敎師は頭髮を櫛するに四本の指と一本の母指とにて足れり然るに若し他の法を用ひて頭髮を櫛理し沐浴する時は其人は徒に時間を費すのみなりと敎へたれどもポイクレートに從ふに

及で其習慣を改めイユデモンの如く其頭髮は能く櫛理して亂れず其衣を着るや整然と正しく其形貌は一個の人にあらずして恰も一個の天使に似たるが如き風に做ふ事を期せり

ラベライスは體操遊歩及び原野に出て遊ぶ事の必要なるを知りガルガンタをして過度に書物を讀み續けて其顏色を青白ならしむるあとを許さず又夜まで勉强せしむるあとなかりき且每朝の課業を終る每に之を遊步場に伴ひ打波の戲れ獵鞠の遊びの如きは讀書の后に必らず之を爲さしめたり又其心意を練習せる輕重の度に應して運動の度に弛張の酌酌をなせり馬乘角觝水泳等身體の運動となるべき者は一切萬端ガルガンタの爲さぬと云ふ事なしといへり然れども是は少しくラベライス氏の過言にして已の思想をして十分に覺知せしむるが爲に故らに設けたるの言に過きず若し斯の如くラベライスがガルガンタに望む通りに

爲さんには四六時中常に之に從事せざるべからず是通常人の爲し得べき事にあらざるなり固よりラベライス氏は中世の隱遁主義に反しガルガンタに種種の體操を課し之を體操の聖となさんとしたるは疑ふべからずと雖ども吾人また一方に於てはラベライスの著書は少しく過言にして虛實相混する事を忘るべからず故にラベライスの正しき觀念を知らんと欲すれば其虛言を減省して事實あり得べき事のみを取るに若かざるなり

第百五、智育

ラベライス氏は心身共に活動力の大ならん事を企望したりガルガンタは毎朝四時に起て一日の大半は學問研究に費せり中世に在ては智力上の研究は一切放棄怠慢されつつありしにラベライスは之に反して絶えず心力を活動使用すべき事を務めたりガルガンタは第一着歩に古語を研究し其古語中最も重としたる者は希臘語なり當時に在ても希臘語の如きは人の之を顧みる者無かりしが之を恢復したる者は全くラベライスの功なり

氏の言に曰く今日は往古の敎育法は惡く恢復し而して希臘ヘブリユチヤルデヤン及び羅甸等の語は再び世に出づるに至れり（希臘語を知らざる者は學者の耻辱あり）

今日に用ふる所の書物は頗る華麗純正にして是等は孰れも上帝よりの神通に成りたる者なり又一方に於ては大砲の發明あり是亦鬼神の勸告に成りたるものなり實に今日の世は賢人良敎師各所に充滿し書籍館は頗る宏大にして至る所に之あらざるはなし余謂らくプラトウセシロ及ハヒニヤンの時代と雖とも今日の如く學問研究に好機會を得たる事なかるべしと思ふなりと云へりラベライスも又其當時の人と同しく古文學の熱心家なり然れども氏の當時の人と異なる所は氏は殊に諸の理學を嗜み就中萬有理學を嗜みたるに在るなり

第百六、萬有理學＝中世に在ては萬有理學の研究の如きは全く是を怠慢に付し居たり事物を觀察する術の如きは中世紀の偏促たる能辨家は一向に之を知るものなく只機にアリストートルの理論若くは聖書に就て其一班を伺ふのみ且不朽なる精祠の寓居する所の此等萬有の研究の如きは毫も價値なき者と信じ加之彼輩は謂らく推測式の目的に對し萬有理學中其必要なる部分だけは自ら能く發明する事を得べしとラベライスの如きは實に是等理學を以て人間の思想を費すに足るべき學科の初位に置ける諸教育家中の先鞭者なりと稱すべきなり

中世紀の學生は萬有の事に關しては一向に無識なりしがガルガンタの如きは其子に實なるに一を萬有界の事を知らざるべからざる事を以てせり氏のパンタグリュールに寄せたる書中に云へるあり曰く余か足下に望む所は當に能く注意して河海泉湖凡ろ一切の水中に棲息する所の魚類は足下皆之を知らざるなきにあり空中に飛揚する所の一切の鳥類一切の草木深淵に蟄伏する鑛物遠西遠南の寶石足下皆之を知らざるなきを望むなり又當に注意明察して人間界の知識を會得せよ要するに余は足下の爲に智識を得るの新境界を指示するものなり

其れ斯の如くなるが故に萬有界の學問若くは人間界の智識を組成する者は一として之が觀察を施さざるはなし

且ラベライスは其弟子の只其萬有界を知るのみならず尚之を愛し又親しく之に遭ふを望みたり故に氏は其弟子に田舍に行て草木の間に在てヴイルヂルの「ヂオルジック」（農夫の耕作）を誦讀する事を勸告せり此點に於ても氏は亦ルーソーの先驅者と謂て可ならん氏謂らく萬有界の美妙を冥想する時は自ら想像力を新にし精神を休養し隨て靈魂の强健を助くるものなりと

ポノクレートはガルガンタの非常なる勉強の勞を慰めんが爲めに毎月一度天氣の清朗なる日を撰び早朝より市街を出てチヤンチルリーボーロンモントローデボントチヤレントンウワンヲス若くはサントクラウド等に行き終日唱歌し蹈舞し談笑し或は雀を狩り或は瓦礫を拾ひ或は蛤魚蝦蟹等を釣りすべき事を勸告したり

第百七、實物教授＝ラベライスの工夫せる研究法に從へば生徒たる者縱へ其机卓に向ふ時と雖ども其心意頗る爽快を覺ふべし氏の談話は常にガルガンタの注意を惹くに足るべき實物に關し即ち食物の事、水、酒麵包及鹽等の性質に關するが故に談話中自ら敎育を含み其疑問及說明の材料となるべき者は皆感覺し得べき實物に係れりガルガンタは原野を徜徉し牧場若くは草木の繁植せる地に就て親く草木を觀察し古書に載せる所と之を比較し其家に歸るに及ては其草木の一撮を携へ來り以て本草學を研究せり而して斯の如く實地に親しく經驗して之を學ぶみにして實物を示して敎育法に依て其理法を敎ふる如きは極て稀なりラベライスの敎育法は即ち斯の如し其氏のガルガンタをして銀匠の庫、鑄鐵所、化學師の仕事場及び其他種種の店頭に就て親して實驗せしめたるも亦前陳の精神に外ならず（恰も今日は流行する學問的の周遊の如し）

斯の如くなるが故にラベライスは必らず技術工藝に熟達し又ルーソーの「エマイル」の如く能く力を勞するの仕事に其身を委ね得べき一個の完全なる人類を製作し出す事を得べし若し雨ふりて外に出る事能はざる時はガルガンタは毎に家に在て材木を斬鋸し或は小屋の中にて穀物を打つを常とせり

第百八、引誘法＝中世紀敎育法の煩悶不愉快なるに反してラベライスは遊戲中に敎育を授け數理の如き者と雖ども運動嬉戲の間に之を

授くるを主とせりガルガンタの數學に關係を有する數千の新工夫を授かりしは全く牌子を弄ふの間にありたり幾何學天文學を授くるもまた此方法に依れり又多藝なるを善とし擊劍の如きは殊に其重する所なりガルガンタは實に非常の人間にして音樂繪畫及彫刻術の如き彼皆之を知れりガルガンタは一身を以て社會全體の人類を代表し人間萬般の欲望萬般の需用を一身に引受けたる者と云ふべし中世紀に在ては其侷促たる精神より人心の意向を抑制し之を發暢せしめざりしがラベライスは其意向の如何なるに拘はらず誰彼れとなく孰れも之をして活動暢發せしめたり

第百九、宗教的の教育

其他の事に對すると同じく宗教の事に對してもラベライスは亦其外面虛僞の風を惡みたりガルガンタの尙巧辨家の敎師に從ひ居たる時其厚餐を食ひ了りて二十六箇若くは三十箇の贊美歌を聞くが爲に其智力の事に關する談話を聞くの前に先づ敎會に行くを冷笑したる事ありきラベライスは斯の如き外面の信仰繁冗なる習慣を棄てて易ふるに眞實なる信仰心を以てし又直接に聖書を讀讃せしめたり氏の云ふ所に據るにガルガンタは人をして已に衣服を着せしめつつありし時に聖書の一頁を讀ましめて之を聞けりと且尙甚しきは書物に據らずして直接に上帝の工作を研究し親しく之を禮拜せりガルガンタなり其師たるポノクレートなり橫臥して天體を觀察し其穹蒼の洪大無邊なるを感服し始めて起き擧りたりと云ふ夕に至ても亦同じく天體穹蒼の事を冥想して更に餘念なかりきガルガンタは其食事を終り將に眠らんとする時に當て上帝を贊美し其無限の善德を頌揚し過去の保護を謝して將來の愛顧を祈りたりラベライスの宗敎の感應は恰も新敎の改革を激發せしめたる感應と尙近代に於けるルーソーの自發神敎

（上帝の存在を信すれば共天啓を信せさる敬孤）を鼓動せしめたる感應と其源を同ふせる者の如し

第百十、德育＝若しラベライスの評判のみを聞き又其談諧戯談のみを見る時は斯る人も尚道德の敎師となす事を得べきやと頗る訝怪に堪にざるものあらん然れども左に拔抄する章意の誠實にして且高尚なるを見るときは氏を以て道德の敎師となすに足るものあるを見ん

其言に曰く賢明なるソロモンの言に從へば智慧は惡人の心中に宿らず眞心なきの知識は靈魂を破滅せしむるが故に汝は宜しく上帝に事へ上帝を愛し上帝を恐れ總て汝の思想を上帝に注くべし總て汝の企望を上帝に屬すべし俗世界の誤謬多きを思へ浮雲に心を委ぬる勿れ此生は終始轉變するものなり然れども上帝の言語は恒久變ずる事なき者なり汝の隣人を裨益し彼等を愛すること猶汝を愛するが如くせよ汝の敎師を敬せよ惡人の仲間を避けよ上帝の汝に與へたる恩惠を無にするなと勿れ汝若し以上の方法に依り既に一切の知識を會得し得たりと思はば宜しく余が許に來るべし余は汝に逢ひ余が生前に福祐を汝に與んと欲すればなりと

第百十一、モンテーン（千五百三十三年生千五百九十二年死）**及ラベライス**＝エラスマスは專ら文學に熱中せる人なりラベライスは一個の大膽なる改革者にして智力の區域を及ぶべき丈け擴張し人間知識の一切を擧げて其頭腦の破壞を來たすまでに之を生徒の腦裡に注入するを主とし二氏共に其中道を得る事能はざりしがモンテーン氏の如きは謹愼戒飭して一切の過不及を惡みて中道の敎育法を執りたりラベライスは一切の能力を平等に開發するを主とし一切の學科、文學、理學等を平等の地位に置きたるが如しモンテーン氏の如きは然らずして自ら擇擇する所あり各種

の能力中に就て特に斷定力を練習するあとを務め各種の知識中に就て特に其能く確實にして感動し易き心意を形成すべき者を撰ふべきあとを勸告せりラベライスは過度に心身を驅逐し各學科を一々深く研究し得べき非常の方案を工夫せんと欲しモンテイン氏は之に反して只諸理學の上層を味ひ佛蘭西の風に從ひ深く其中に入らずして外面のみ經過すれば足れりと稱せり氏の意見にては善く充實せる腦は能く形成せる腦に若かずとせり無量の知識を積集するは淺き知識を消化し同化するに若かずとせり之を喩ふるにラベライスは知識の饗應に臨みて檀に之を貪食し其飽くを知らざるが如くモンテイン氏は能く謹愼して巳の飢を滿足すれば足れりとする者の如し

第百十二、モンテインの自身に受けたる教育

はず其自身に受けたる敎育法を反省するときは又其方法を以て人の師

となる事を得るは往往之ありモンテーンの如きは即ち其人なり氏の敎育の方法は取も直さず氏の父が氏の身上に適用し且グウェン專門學校の飮典と不德とを非難し之を對して其父自ら工夫せの敎育法を摸倣したるものなりモンテーンの家庭敎育は小兒の束縛を受けずして自由に其能力を開發せる好摸範を示す者なり氏の自云ふ所に據るに余が精神は温和と自由とに依て練習され毫も嚴制束縛を受けたる事なしと氏の父は柔和の手段を以て氏を遇するの方法に熟達し其朝起を促すに之を驚かして苦惱せしめん事を恐れて每朝音樂の音響を籍りて其朝起を促がせり要するに氏の父の氏に授けたる敎育法は自由と强健とを兼ねて其自由は放縱に失せず其强健は苛刻に流れず實に中和の敎育法なりモンテインは之を稱して緩急合宜の敎育法なりと云へり此外にモンテインの受けたる敎育法の殊別なる点は其羅甸語を學ぶに恰も其

本國語を學ふが如くなりしにあり氏の父は氏の左右に侍せしむるに羅甸語のみにて談話すべき家人及教師輩を以てせり故に其六歳の頃には既にメセロの語に熟達し當時の有名なる羅甸語學者と雖も羅甸語を以て之と談話するを憚りたる位なりき然れども之に反し氏は尚其時アラビヤ語を知らざる位に佛蘭西語をも知らざりしなり故にモンテイメの家の執りたる教育法は固より謬りたるに相違なしと雖も又此教育法に依て氏は通常世間に無味無興の死語を研究するに當て用ふる所の方法は固循に過きて機械的に失するとを曉り其弊害は只規則に拘泥して十分に實際に注意せざるより生ずる事を曉るに至れり氏曰く希臘語と云ひ羅甸語と云ひ孰れも粧飾の最も重ずべき者にして且人に大利益あるものなれども然れども吾人は餘り高く之を買ふなりと氏はグウイヨの專門學校に在るおと七年なり其間體罰及苛刻なる規律の頗る惡

むべき事を知れり其言に曰く是等の儒者に適當穩便なる手段を以て小兒に書物を勸めずして只鞭笞責板と恐怖暴虐の手段とのみを用ふ斯る暴虐を廢せよ斯る強迫を止めよ余思ふに斯の如き暴虐強迫程善良なる性質を衰弱破壞する者は之なかるべし吾國專門學校の大半は其管理甚だ嚴格にして常に余をして喜ばざらしむ中略是等の學校は恰も少年の徳戒院の如く中略試に課業時間に是等の學校に來て見よ只其聞く所の者は教師の怒聲の雷の如くなると小兒の之に對して謝する號泣の聲のみなり斯の如く猛惡なる容貌と鞭笞とを以て柔軟怯弱なる小兒に臨みこれを扱ふ所の方法は甚だ醜惡にして危險なり中略其樹木楊柳の枝頭に鮮血の粘付するを見るよりも絲葉美花の教場内に散布するを見る方豈心に快よからずや若し余をして學校の管理を擔當せしめば余は當に

歡樂、喜悅、及び花神美女の繪畫を以て學校に書くべきなり中略實益の有る所はまた其情の悦ぶ所ならん

第百十三、特殊の教育より寧ろ一般の教育を必要とす

＝モンテインの著せる冊子中の各章に教育法の疑問に關して注意せる號の散見せるは獨已の生徒たる時を回想せるに依て然るのみにあらず倘氏の人性を知悉するの大効は小兒を養育教授する事柄の中に在て存せりと云ふの斷定に基て然るなり

氏は教育は人間を形成するの術にして特殊の事を教ふる術にあらずとの趣意をば氏は古事記の體に倣ふて左の如く陳述したり

一日オルリヤンに行く途中に二人の儒者互に凡そ五十歩も相隔りてオルリヤンの方に向て歩み行くに出會たり其後に遙か隔たりたる所に余は馬の一群を見たり其馬群の前面に前のロチエホーカルト侯たり一貴人の乗り居るを見たり余が同伴の一人其一番前に進む一人の儒者に向ひ後より來たまふ貴人は何人なりやと問ひたるに其人は已の仲間の事を問ひたる事と思ひ後の方を見返りもせず悦はしげに答ふる樣彼の人は貴人にはあらず彼人は一個の文法學者なり而して予は理論學者なり予等は今日只今彼の貴人を歓養する事に與かり居るが故に止むを得ず斯く閑日を濫用し居ると雖とも實は予等は外に職業を有し居るなりとモンテーンも斯る場合に單に人と稱せずして貴人と稱したるや疑ひあるべからず然れども氏の思想を尋ぬる時はルーソーなり及其外普通の教育を必要なりとする人の思想と同一なるべし

第百十四、指教の目的

＝以上陳述する所に據て之を觀るにモンテーンの説にては文學及其他の學科を以て只一個の方法手段と見做し之を指教の目的と爲さざるや明瞭なるべし氏は十六世紀の學生の全く

文學の事に熱中し敎育の目的は古の言語を知るに在りと心得たるが如くならず書生の羅甸語を以て文章を綴るが如きは固より氏の藐視する所なり而して氏の要する所は才智を長し確實なる斷定力を備ふるに在り氏曰く若し生徒の精神をして調和ならしむる事能はず其斷定力をして確實ならしむる事能はずんば余は寧ろ打波の遊戲に其光陰を消せしめんと欲するなりと

第百十五、斷定力の教育　モンテーンは數百の方法に依て已の企望する所の思想を吐露したり氏の最も重する所は斷定力の練習なり左に氏の此点に關する說の全體を拔抄すべし前略今日吾人の受くる流行の敎育法にては縱へ賢明の學生及敎師となり得べしと雖も適當の人物とはなり得べからず是怪むに足らざるなり事實吾人等の兩親は知識を吾人の腦裡に注入するが爲に其注意と費用とを惜まざるなり然れども

吾人の斷定力及德に關しては毫も裨益する所なし試みに往來の途中に於て人に論て云へ嗚呼彼人は學者なるかな是れ善人なるかなと彼等は必らず前者の方へ其目と注意とを向くるや必せり又試に云へ嗚呼彼は愚人なるかなと然る時は往來の人必らず急に聞て云はん彼人は希臘語を知り居るや將た羅甸語を知り居るやと彼は能く詩歌を作るか將文章を綴るかと其彼は善良謹愼なりやと問ふが如きは最も緊要の問なれども斯の如き問を發する者甚だ稀なりされども吾人は宜しく彼人は善く學びたりやと問ふべし宜く彼人は多く學ひたりやと問ふべからず

吾人は只記臆力に充盈する事のみを務めて常に悟性と良心とを空虛ならしむる今日吾人の師たる者は書物の表面を輕々看過し其智識を舌頭に載せ以て之を其生徒に頒布する有樣は恰も鳥類の穀物を捜索し己之

を味ふあとなくして只之を嚢頭に挾み以て其饑を哺育するが如し

第百十六、氏の宜しく取るべしとする學科＝モンテーンは實際實益を重するが故に其研究すべき書物を定むるもまた此趣意に基くなり氏は深淵なる學理を研究するを重せず實地に利益なき研究の如きは氏の取らざる所なり氏はラベライスに反しラベライスは冥想思辨の能力を開發するあとを主としたれどもモンテーンは實地的の能力を開發する事を務め萬事を擧げて皆道德の屬隷となしたり例へば歷史を敎ふるに當り其注意すべきは其歷史上の事實を知らしむるにあらずして其事實を敬重せしむるに在りカルセージ亡滅の年月を覺ゆるはハンニボール及びスシピオの性質を知る程に必要なりとせずマルセルラスは何處に死せるやを知るはマルセルラスの其處にて死せるは何故に義にあらざるかを問ふ程に必要なりとせず又氏の哲學を敬重する趣意は其人間なり萬物なりに關する普通の智識を得べきが爲にあらずして其道德及び生活の事に直接の關係を有する個所あるが爲めなり

氏の言に曰く事物の當さに今日の狀態にて存すべきは是れ憫然の次第にあらずや哲學の如きは理解力を有する人と雖ども當さに以て無益にして空想の名稱となし人の意見なり動作なりに取り毫も其要なき者なりとなすべし是亦憫然の次第にあらずや其人をして此の如く思はしむるに至りたる所以の者は哲學を以て能辨の具となすに依るなり中略哲學は生活法を吾人に敎ふるものなりと

第百十七、敎育法＝純粹に書物的の敎育はモンテーンの嗜む所にあらず氏は重きを書物に歸せずして經驗交際或は事物を觀察し心自ら覺る等の事を以て最も重すべしとなしたり

氏曰く正しく事物を判斷し巧に談話せんと欲せば書物に因るを須ひず

吾人の眼鏡に映射する者は皆書物として代用すべきなり小厠の詭騙奴僕の失錯机上の笑談一として思考を施すべき新事物ならざるはなし又人と談話し外國に旅行するが如きもまた此目的を助くるに大効ある者なり中略其外國の習慣風俗を携帯し來り彼此相磨擦して益自己の才智を銳利敏捷ならしむる事を得べし

前略生徒を敎ふるに時として書物を用ひ又時として書物を用ふべし小兒をして一農夫なり一泥工なり各其人に就て其人の才能を吟味せしむべし萬物に關し正しき好奇心を其腦裡に注かしめよ其身の周圍に在る物にして苟も小兒の好奇心を感發せしむべきは其何物たるを問はず皆之を觀察せしむべし即ち或は美麗なる馬或は清鮮なる泉水或は有名なる人物古戰場の景色或はシヤリ、レマンの事蹟等の如し云々と言辭を敎ふる前に先づ物を敎ふべしと云へるの一点に關しては

ゴメニヤスルーソー及總て現時の敎育家に先鞭を着けたりと云ふべし氏曰く小兒の心中をして先づ物を貯へしむべし從て言語は直に生ずべきなり

今日の人は皆喃々と囈語するの風をなし其談話を爲す者甚だ寡くして多言ならざる者殆と稀なり而して吾人一生の大半は皆此の如くにして打過ぎ言辭を學ぶに四五年を費すを常とす云々余は以上の如くに云ふと雖も決して巧に談話するの美事にあらずと云ふにはあらず之をして談話せしむべき準備をなすの美事たるに若かずと云ふなり余の憂ふる所は以上の如き事柄に多く吾人の一生を費すに在りと

第百十八、讀書の方法

モンテーンは痛く書物の弊害を批評して左の如く云へり曰く余は吾人の小兒を幽囚し書物の奴隷となす事を欲せず中略余は小兒を架柱へ繫くが如く一日に十四時間若くは十五時

間之を苦しめ以て其精神を臆病鄙屈となし終に之を駑馬と爲すを欲せず一意書物に偏する者を見るに其容貌は愀然として揚らず世事の談話を爲すに適せず又他の職業を執るに適せざるを見るが故に只書物のみに偏するの惰性を養成するが如きは余は善事にあらざるべしと信ずるなりと

以上の如く讀書に偏するの弊害を陳述すると共に氏は又巧に讀書の法方を解釋したり氏曰く吾人をして其讀む所を心中に融解同化せしめよ恰も蜜蜂の花間を此所彼所に轉飛して其甘液を求めて蜜を作るが如くならしめよ其蜜となるに及んでは最早元の茴芹にあらん又牛膝にあらず其書物を讀むに當ては宜しく能く之を反省し批評し著書の思想を已れ自ら判斷して其是非を明かにし以て著書の思想の奴隷となるべからずと

第百十九、モンテーンの誤謬＝モンテーンの一大欠典は其心情の冷薄なるにあり氏は自愛說及びイピキュリヤンの黨派にして只綠艸の繁茂せる牧場及芳香の花間を通ずる陰影の小徑にて容易に得らるべき德のみを重じたり氏は心力を勞すべき義務を自ら執りたる事あるか決して之なかるべし氏の小兒に於ける其尙小なる時は之を藐視し已の側に近づけず其稍愛嬌を生ずるに至て始めて之を愛せり

氏の言に曰く余は赤子の始めて生れ靈魂の運動もなく體形の區別もなき間は之を寵愛痛惜するの情なし而して余は斯の如き小兒をば余が側に養育するを許さず中略決して汝の家內の女子をして小兒の養育を擔當せしむる事なかれ（按家の外にて養育せよと云ふの意か）

氏は又之が例を示して曰く余が小兒は總て哺乳中に死去したりと而して眞に余に備はる小兒と云て可なるべき者は即ち智力の生産なりと云

ひ以て書物を讀む所の人間は宜しく其小兒よりも文字を愛すべしと云ふに至ては又甚だしとなす

第百二十、氏の女子教育に關する意見の不完全なる事

モンテーンの心意上に關する欽典は即ち其節制保守の主義を執りたるが爲に其心情の狹隘なるにあり人間の運命に關する高尚なる觀念の如きは氏に對し望むべからざる事柄にして人間の運命に關し氏の說く所は甚だ鄙劣にして且平凡なりとす此欠典は殊に氏の女子敎育に關せる說に就て見る事を得べし氏も又敎育は女子天性の美麗を戕ふ者なりといふの言に托し女子をして無識の位地に置かんと欲する僞辨論者の仲間なり氏は修辭學の如き者までも女子をして之を學ばしむるを禁せしならん何となれば氏の云ふ所に據るに修辭學は假僞の麗媚を以て女子天性の麗媚を掩ふものなりとすればなり女子は宜しく其女性だけに受くる所の利益を以て滿足すべきなり女子は其天性に備はる所の智識を以て官吏なり學校なりを支配する事を得べし故に別に物を學ぶに及ばざるなりと其後氏は少しく女子に猶豫を與へたれ共其猶豫や却て學問を禁したるより一層女子を賤みたるに似たり其言に曰く若し女子にして男子に讓る事を嫌ひ好奇心より書物を伺はんと欲せしならば其之に適當せる書物は即ち詩歌なりとす何となれば詩歌は全く快樂の爲め外面を衒ふが爲に設けたる美術なればなりと

又左の一節を拔抄すべし

余若し女子にして其女子の職業に對して不適當なり必要なき修辭學及論理學及法律學に携はる者あるを見るときは余は直に女子をして斯の如き學科を學ばしめたるは即ち男子の所爲にして男子たるもの是に依て以て女子を制御せんと欲するの意に出たるものなるべしと推測する

なり

氏は其養女なるミルツゴルチに向ひ不圖眞人樣の愛情と最も完全なる者は其男性女性たるの微跡をも顯はさざる時に於て始めて得らるべきなりと云へり此言や實に女子心情の品性を無視するものにして女子を賤むおと之より甚しきはなかるべし

要するに是等の缺典あるにもせよモンテーンの敎育法は善良なる敎育法にして大に頌讃するに足るもの寡からず「ジヤンセンズッ」派「ロック」及びルーソーの如きは縱へ深淺の差はあれ孰もモンテーンの精神を受けたる者なり然れども其當時に在ては氏の說を容るる者は只其弟子なるチヤルロンのみなりチヤルロンの著はせる「エスセイ」上に散布する思想に順序を立てて之を集錄したるに過ぎず縱へ當時に在ては氏の說は毫も勢力なかりしと雖も然れども凡三世紀の間氏の說は智育上の事に關し之が先導をなし居たり

第百二十一、約解＝一、文學中興紀に於ける敎育上の誤謬に對せる反動の性質を帶びたるにあり

二、第二の特性は敎育上の主義と方法とを調和せんと欲するに在り

三、基底を主權者に發する敎育に反して自由の探討を愛せり

四、偏促狹隘なる敎育に反して自由普通の敎育を主張せり

五、從來は專ら倫理宗敎的の敎育なりしが漸く世俗的の敎育となれり

六、智識を第二位に置ける書物上公式の敎育法廢れて智識を第一位に置ける自然物の敎育法起れり

七、敎育は猶物を製造する手續きに等しと云ふ觀念止んで敎育は物を成長せしむる手續きなりと云ふ觀念起れり

八、其目的は告知に在りとする授業法に嗣くに其目的は心身を形成し鍛練するに在りとする授業法を以てす

九、從來の苛刻粗暴なる罰則に嗣ぐに稍温柔緩和なる罰則を以てし從來の粗野鄙陋なる風俗に嗣ぐに文物の粲然たる者を以てす

第六章　布勒的斯丹德教及初等教授

初等教授の起原○宗教改革の精神○カルビン、メランクソン、ツヰイングリー○ルーサー○日耳曼の行政官と立法官との參與せる告狀○教育の二重利益○公立學校の必要○當時の初等學校の批評○新學校の組織○學科の科目○教育法の進歩○オルリヤンス州の政府○ラテロ○コソニヤス○ベーコン屬の思想○アメニヤスの傳○コメニヤスの重なる著書○教育の四階級○學科の大意を敘ふるの必要○人民學校○學校の位地○直覺力○語學教授を簡略にする事○繰習と實地との必要○コメニヤスの著せる一般の證驗○約解

第百二十二節、初等教授の起原＝教育の歴史家は初等教授の宗教的起原は佛蘭西のラザルの制度と耶蘇教學校の同胞制度とに基き其世俗的の起原は佛蘭西改革等諸達と法律とに基くものとせり然れども人民の爲に始めて初等學校を建築せし名譽は之を二人の新教改革者即ち第十六世紀のルーサーと第十七世紀のコメニヤスの二人に飯せざ

るを得ず故に初等學校は布勒的斯丹德敎に起原して宗旨改革の時に始めて其形を顯はせる者と云ふべし

第百二十三節、宗教改革の精神＝初等學校の發達せしは全く新敎改革の原主義の結果なりとすミチユルブリーエル氏曰く宗敎改革は人をして各其信仰を以て己の責任たらしめ而して其信仰の本原を聖敎に皈し人人をして各自ら聖經を誦讀理會して自ら其身を匡救せしむるを以て其義務と爲したり中略問答書を説明し及之を評論するの必要は即ち敎師たる者に對して其思想を解釋し及其思想を分拆する所以を知るの義務なりき本國語と唱歌との敎授は聖書の誦讀と敎禮とを聯帶せりと然らば宗敎改革は敎育上の革命を胚胎し宗敎を以て學校敎授に利用し信仰と知識とを聯帶せしめたり是即ち三世紀の間各新敎國の初等學校の事に其思想を傾注せし所以なり

第百二十四節、カルビン（千五百〇九年生 千五百六十四年死）メランクトン（千四百九十七年生 千五百六十年死）ツウイングリー（千四百八十四年生 千五百三十一年死）＝然れども新敎の改革者は悉く初等學校の爲に熱心せるにあらずカルビンの如きは宗敎上の爭論辨駁に離騷ともして學校の組織に其思想を傾注せしこと尠く其末年にあり千五百五十九年に同氏がジェネバに建築せし專門學校と雖も羅甸語學の一科を敎ふるの一學校たるに過ぎず日耳曼國の敎師と云ふ稱號を得たるメランクトンは人民の學校の爲に盡力せざるにあらずと雖ども其最も盡力せるは高等學校にあり其デモスセテネスの「オリンシアクス」（書名）を演説して書生の爲に嫌忌せられウイテンボルクの大學校に入りしは頗る氏の不滿とする所なりカルビン及メランクトンの前に瑞典の宗敎改革家ツウイングリーといふ人あり千五百二十四年に「耶蘇敎の道に依て小兒を敎育養生するの方法」と云へる小冊子を著して初

等學校の爲に頗る意を致せり其耶蘇敎の道に從て小兒を敎育養生するが爲には博物學數理學を課せざるべからず又國家不時の防禦に備ふるが爲に擊劍の演習を課せざるべからずとせり

第百二十五節、ルーザー（千四百十三年生千五百四十六年死）＝日耳曼の宗敎改革者なるルーザーは其同時の宗敎家中に就き最も熱心に初等敎授の爲に盡力せる人なり氏は人民のために學校を設立するの必要なる所以を述べ之を主治者に抗疏せるのみならず尙ほ氏の力によりて敎授の方法は大に改良も敎育上の精神は新敎の主義と相投合して其面目を一新せり自發自由思想及自由探討は新敎の基礎にして新敎の支配する所は到る所に機械的に復誦學習するの方法及主權者の干涉を廢し獨斷的敎授の下に羈束せる智力を發揮し學問の宗敎保護內に蟄居せるを救出せりとは是世間に稱道する所なり然れども此言少しく誇大に失する所なき

にあらず

第百二十六節、日耳曼の行政官と立法官とに奏呈せる告狀＝千五百二十四年に於てルーザーの特に日耳曼の政府に奏呈せる疏狀中に痛く學校敎授の怠慢に陷れる所以を論じたり氏謂く基督敎禮拜堂は固と學校の母なれども普通敎育の目的を達せんが爲には殊に俗間人民の力に依賴せざるべからずと又曰く各市邑は每年道路の修繕城壘の固め兵器の買入兵隊の準備等に莫大の資金を費す何ぞ一二の學校を維持するが爲に同一の資金を費さざるべからさるの理あらんや市邑の繁榮は單に其天然の富裕城壘の堅固第宅の宏壯及兵器の充實のみに依るにあらず市邑の安固強健なるは善良なる敎育を布て其人民を敎養訓練し理を見る事明かにして名譽を重せしむるに若くはなしと

（原註ルーザーの强迫說は之を紹介に附すべからず其說に曰く主權者は人民を强て其小兒を學校に遣すべき義務あり（中略）主權者にして其人民を腹で銃槍を

負はしめ城壘に登らーめ兵役に從事せーむる事を得るとせば人民を强て其小兒を學校に遣らーむる事を得べく又遣らーめざるべからざる一層强き理由なからざらんや蓋し學校は心の惡魔も戰爭も棄る所なればなり）

第百二十七節、教育の二重利益＝ルーザーの事跡に關して特に注意すべき點は氏の偏に宗教上の見解より敎育を論せざるにありと す學校を以て宜しく禮拜堂に附屬すべき制度なりと勸告せるの後に氏は左の如き見解を下せり曰く靈魂天堂若くは地獄の如き者之なしとするも尙ほ下界の事務を取扱ふが爲には學校は必要缺くべからざるものなり是希臘及び羅馬の歷史に依て徵すべきなり男子の能く國家を支配し女子の能く其子孫を養育し其家事を扱はんが爲には男女共に敎育あるべからず是國家は男女に敎育あるを要する所以なりと

第百二十八節、公立學校の必要＝ルーザー曰く若し公立學校を必要なりと唱ふる時は恐らくは之に異議を容れて小兒の敎育は家庭

にて足れり學校は無用なりと云ふ者あらん余は之に答て家庭に一任せる小兒は如何なる敎育を受くるや吾人の明見する所なりと云はんと欲するなりと雖も て其無智蠢愚にして人と談話する事能はず人の爲に善良なる助言を爲す事能はざる樣を示し及び世間のことに經驗なき有樣を示し尋て若し學校の敎育を受る時は其敎師たる者は言語技術及歷史に就て指敎を施す事を得べきが故に小兒は暫時にして世界創造以來の事實を其心裡に集むるあと恰も物の鏡面に映するが如きものあらん而して此等の事實を心裡に集る時は又是に依て自ら其身を率ひ及び能く他人を勸敎するの智慧を得るに至らんと

第百二十九、當時の初等學校の批評＝或は難して曰く公立學校なかるべからざるが故に既に設立せる公立學校あり是を以て滿足すると能はざるかとルーザーは之に答て今日の兩親たる者は學校に

其小兒を送る事を怠り且學校に就て學ぶ者も今日の有樣にては其得る所の結果は更に實際に益なき所以を証明せり氏曰く吾人は今日奇怪なる方法にて上帝に服事する所の人民を見る彼輩は能く戒食し粗服を纏ふと雖ども家内に在て眞に上帝に服事するの道を知らず即ち其小兒を養育する所以の道を知らざるなり中略汝人民余が言ふ所を疑ふ勿れ汝は錢を出して赦罪を買ひ外國の禮拜堂に詣り若くは軍兵の誓願を爲すを以て缺くべからざるとなりと思惟するも然かも其小兒に注意し之に敎育を施すが如きは尙一層必要なる所以を知らず中略普通人民殊に猶太人の如きは耶蘇敎徒に比する時は能く其小兒を强て學校に入學せしむ是れ耶蘇宗敎の位地の卑低なる所以にあらずや蓋し學校敎育は其勢力を來世に及ぼす者なれば然るに若し之を怠慢に附する時は耶蘇禮拜堂は恰も春時に手入を怠りたる花園の如くならん中略小兒は毎日生產し

及び成長しつゝあるも不幸にして之に注意する者なく之を敎練するに思慮を費す者なく只小兒の爲すか儘に任するのみ其漸く二十歲以上に至り始めて纔に僧侶となりて供養祭に與かるに足るに過ぎざるが如き醜惡なる羅甸語を學ぶ者あるを見るは豈に嘆息すべきにあらずや而して其能く玆に到る者を以て極て幸福なる人間なりと思惟し且斯る小兒を有する母は誠に幸福なる人なりと思惟せり噫斯の如き有樣なるが故に其小兒たる者は一生涯無學の人間となり又其身は一として知る所なく且人に善良にして有益なる事を敎ふる事能はざる敎員其人の如きは余は到る所に之を見ざるは無なり彼輩は又如何にして學ぶべきか如何にして敎ふべきかをも知らざるなり其二十歲以上に至るまでの間に高等學校及寺刹にて學ぶ所は其驢馬たり木偶人たるべき者にあらしずて果して何事ぞや

第百三十、　新學校の組織＝魯テルーザーは新學校を組織するに決心し之を維持するの資用を國庫の負擔となし世の父母に説くに小兒を學校に入れて敎育を受けしむるは子に對する德義上の義務なりと云ふを以てせるのみならず尙ほ人民たる者の義務なりと云ふを以てせり而して終に自ら敎育事業を助くるの方便を思考せり氏謂らく何れの土地を問はず其大欠典とすべきは敎師の欠如せるに在るが故に吾人は宜しく敎師の自ら進て來るの時を待つべからず宜く我より進で之を敎へ以て敎師たらしむるの準備をなさざるべからずと氏は以上の目的を遂せんが爲に學校の生徒たる童男童女中の最も優等なる者を定時外に留め置き特別の敎師をして之を敎へしめ又之が爲に書籍館をも設けたり氏は決して女敎師と男敎師とを區別するとなく女子の爲に學校を必要なりと思惟すると男子に於けると異なるとなし父母の負擔を輕く

し及び小兒を傭ましめざるが爲に學校に在るの時間をば甚だ短縮せり氏の言に曰く汝人民は余に問て云はん吾人は小兒に牌れて暮すとを得べきや旦貴人の如くに之を養育するとを得べきやと又問て云はん小兒たる者は家に在て仕事をなすとは必要にあらざるかと余は之に答て云ん余は小兒の自餘の物を學ぶとなくして其（ドマタス）若くは（アレキサンドル）（原註ドマタスは紀元第四世紀の中頃に羅馬國に於て敎授せる有名なる文法家にして又論理學者なりアレキサンドルは希臘人にしてアリストートル著書の註解を以て名あり紀元第二世紀の末と第三世紀の始に於て雅典に於て哲學を敎授せり（ドマタス）は文法書の名なり（アレキサンドル）は哲學書の名なり）を研究するが爲に二十歲若くば三十歲を經過せしむるを以て常となすが如き學校を決して贊成せざるなり今日世の事情は全く以前と異なるが故に余謂らく小兒たる者は一日に一二時間學校に在て學び自餘の時間を以て家に在て職業を學ばざるべからず此二者は同時に學ぶと誠に望ましき事なりとす今日に在ては小兒たる者は球戲競爭等に二倍の時

間を費すは明瞭のことなるが故に家の職務を怠る事なく學校の教育に同一の時間を費すことを得べきなり彼輩は又過眠跼舞に二倍以上の時間を費やせり、

第百三十一　學習の科目

ルーザーは宗教を教ふるを以て第一となせり其言に曰く耶蘇教徒たる者は九歳若くは十歳の頃より上帝の存在を知るべきは豈に至當の事にあらずや次に語學を必要となせり但其語學は本國語にあらず羅甸希臘及ヘブリュ語なり氏は尚ほ語學は普通教育の基礎を爲す者なりとする舊時の思想を脫する事能はず氏は羅甸語學校と初等學校と分離せるを以て誠に美事なりとて自ら特にコメニヤスの功を稱讃しながら尚ほ語學の研究すべきを勸告せり併し語學の研究は專ら實際に就て研究すべく一に文法上の規則に拘泥すべからずと云ふに至ては誠に名言なりとす

ルーザーは又數理學及萬有學を課するを善とせり而して氏の最も重する所は歴史と歴史家なり氏謂らく歴史とは眞理を混亂せず上帝の事業を隱蔽せざるが故に之を眞民と稱すべく之を眞教師と稱すべきなりと

中世紀の藝術の如きはルーザーは左程之を稱讃せざりき氏曰く能辨術の如きは知識を養ふ者にあらずして只既に知る所のものを巧に語るの器械たるに過ぎずと此言や誠に當れりと云ふべし

體操の如きは氏敢て之を忽諸に附するにあらずと雖も殊に意を致せる者は唱歌なり氏曰く學校教師にして唱歌を知らざる者は誠に言ふに足らざるなりと又曰く音樂は人をして寛和温順ならしむるものなりとせると同時に又教育法に新精神を導入し學校をして自由喜樂の場所た

第百三十二　教育法の進歩

ルーザーは研究の科目を增益

らしむることを企望せり

氏曰くソロモンの如きは眞正なる學校敎師なり氏は僧侶の如く少年を學校内に閉鎖し其世間に出づるを禁して幸福を得せしめざるが如き者にあらず若し少年を強て世間に出さしめざる時はアンセルムが世間に出でざる少年は恰も瓶中に生する草木の如しと云ひしが如き有樣に陷るべし僧侶は少年を幽閉するあと恰も籠鳥の如し少年を世間に獨居せしむるあと固より危險なきにあらずと雖も之をして萬般の事物を見聞し學習せしめ以て傍ら之を檢束し名譽の規矩を守らしむる事是亦緊要なりとなす遊戲運動の小兒に必要なるあと恰も飮食の必要なるが如し從來の學校は實に牢獄若くは地獄の如く其敎師は酷吏の如く虐待を受くる小兒は何事に對しても逡巡躊躇するを常とす其兩親の面前に在て常に戰慄する所の小兒は生涯風の爲に吹れて散亂する木の葉の聲を聞くも尙ほ戰慄するに至るべし

以上の言は以てルーザーの精神の寬裕なると氏の敎育家たる思想を窺ふに餘りあるべき氏は敎師の職を稱讃するあと氏の右に出づるものはあらざるべし氏は敎師の職を以て之を宣敎師の職と對比し一切の職業中敎師の職ほど貴重すべく且要用にして善良なる者はあらじ余は宣敎師の職と其輕重を定むる事能はざるを知るなりと

然れ共吾人は宜しくルーザーの盡力は當時流行の敎育上に捗ばかしき影響を及ぼせりと思ふべからず當時氏の盡力の爲め只習字學校と稱する二三學校の設立あるを見るのみにして彼の三十年の戰爭及其他の事變は大に氏の敎育上に關する運動を防害したりき

第百三十三、オルリアンス州の國會＝日耳曼はルーザーの刺激の爲に漸く初等學校の設立を見るに至りしと雖ども佛蘭西にては

當時尙ほ未だ初等學校に意を注ぐ者あらざりき併し千五百六十年オルリアンス州の國會が發表せる企望は頗る初等學校の必要を感じたるものの如し今左に其奏章中の一章を拔抄すべし其奏章中に曰く此國の少年を敎育すべき學校敎師と各市區に於ける學者とを支保せんが爲に寺院の歲入に課稅し兩親たる者を强迫して其小兒を學校に入らしむべし若し之に從はざる時は罰金を課すべし候伯若くは普通の官吏をして規則を執行せしめんと欲すと

加之演說の如きは解し易き諺即ち本國語を以て聖書の趣旨を陳べんとを請求せり此等貴族輩の請求は頗る公平にして且熱心なりと雖も人の之を願るものなく布勒的斯丹傳敎の衰微すると共に佛蘭西に於ける初等學校の運命も亦地に落て振はず十七世紀及十八世紀の貴族輩は最早一人として人民敎育の必要を說て之を奏稟するものなしデテロット氏の批評誠に至當なりと云ふべし曰く當時の貴族輩は農夫の書を讀む者あるを悲しみたり要するに其意は人民にして書を讀むを知るときは其壓制も難きを知ればなりと

第百三十四　ラーテッヒ（千五百七十一年生千六百三十五年死）

ラーテッヒ十七世紀の上半紀に日耳曼人なるラーテッヒスレーブ人なるコメニヤスの兩人出でてルーテルの敎育思想を受闡ぎたり然れども實際に於ける功績の大小に至ては二人自から同じからず

氏は江湖先生及權謀家の風に倣ひ其自ら（ダイダスチック）（按敎法の意）と稱する新案の敎授法に不思議の力ありと唱へて之が擴張に盡力し又其工夫せる語學敎授法は能く六ケ月間にヘブリュ希臘及羅甸の語學を授け得べしと稱せり其行爲の奇怪にして且誇大なるにも拘はらず其中自ら實益の思想を含畜せざるにあらず氏の功績の最なる者は古語をば後にし

て先づ本國なる日耳曼語を授くるにあり英國の敎育家アル、エッチ、クエック氏は其著せる敎育改革家列傳と稱する冊子中に於てラーテッヒ敎育主義の要點を約言せり曰く第一物を敎ふるには其時と順序とに從はざるべからず且天然の法則に從て易より難に移らざるべからず第二同時に許多の學科を敎ふべからず吾人同時に一個の瓶中に於て肉湯、獸肉、魚肉、牛乳及野菜を料理すること能はざるなり第三度々一事を反覆せしむべきなり第四度々一事を反覆せしむる時は生徒は自ら其理由を曉解するに至るべきなり第五學校の敎課書は同一の結搆に據らざるべからず第六先づ物の大體を敎へて然る後に其詳細を敎ふべし概則を先にして細則を後にすべし第七以上孰れの場合に於ても專ら經驗に據るを主とすべきなり其經驗を主とするとは即ち憑據を主とし古人の證言を主とし又理性に訴へて其是非眞僞を辨析せざるべからざるを云ふなり第八敎授には壓制を用ふべからず壓制と觀笞とは天然の理に反し少年をして學習を厭はしむ凡ろ人間の悟性は其當さに把住すべき者に對しては壓制を加へざるも喜て學習するものなりとラーテッヒの敎育主義は多小之に修正を加へざれば或は不都合なる箇所之なきにあらずと雖も大體に於ては誠に善眞なりとす然れども氏は此主義を應用する所以の方法を知らざる者の如し之を應用せし者は即ちコメニヤス其人なりとす

第百三十五、コメニヤス（千五百九十二年生千六百七十一年死）＝久く其名を人に知られず且其能力も世に稱せられざれし彼のコメニヤスは終に其同時の人々より欽稱せらるるに至りたりミシレット氏は氏を評して曰くコメニヤスは不世出の天才あり且其性質温和にして頗る萬事に通ずとミシレット氏は又氏を稱してコメニヤス氏の如きは當時の敎育家中の領袖と

稱して可なりペスタロッシーの如きは其次に位する者なりとミシレット氏の言は決して誤評にあらずコメニヤスの性質の豪勇なるはまた其智力の秀逸なると相若けり千百の防害に其心を屈せず一生を普通教育の事業に委ねて小兒の教育に意を致し教員の職を轉する事二十個所にして二十冊の書物を著したり且初等教育の何者なりやを判然と悟曉せるは氏を以て嚆失と爲す氏は今日より凡そ三百年以前に在りながら尙ほ能く授業の順序次第を論定して頗る其精を極め今日より見るも敢て遺憾とすべき所なし氏は又授業法に關する緊要なる規矩を定論し之に論理法の主義を巧に應用したりミシレット氏は氏を評して近世教育社會のガリレヲなりと云へり吾輩は將に評して近世教育社會のベーコンなりと云はんと欲するなり

第百三十六、ベーコン風の思想＝教育の目的は科學の目的と

深く相關し科學の進歩は亦必ず教育上に其影響を及ぼす故に若し一個の改革者出でて眞理の發見に關する理法を變革する時は亦必ず其理法に照し教育上に關する規矩を改革する者ありて出づるを常とす科學的の理法の一新する毎に必らず教育上の面目を改むるの實あり

ベーコン氏は第十七世紀の初に於て從來未だ人の知らざりし科學的探討の新方案を開きたり從來は只名題と言辭とを叙列對照し之を推測式と稱して徒に空想を是れ事としたるがベーコン氏は之に代るに實際活事物に當て之を探討するの方法を以てし器機的の推論に代ふるに循々耐忍して能く事實を説明するの風を以てし以前に在ては善惡に拘はらず定却の眞理なりと世間の一般に信する所の主義に對しては偏に之に依從して深く之を議する事なく又推測式に巧なるを重ずるの風なりしが今は全く之を棄てて眼を開て宇宙の事物を考察し觀察經驗直覺等の

力を藉て深く其秘訣に入り其理法を考定するを要し又簡單なる物の智識より漸く歩を進めて事物の概則を發見し以て一切萬物の道理を明かにするを要するに至れり斯の如きは決して閉居冥想の能する所にあらざるなりと

以上學問研究法の革命は學問上の面目を一新し實に緊要なる革命なり而して此學問の革命は自ら其中に敎育上の革命を含藏する者なり而して學問上に關する革命を以て之を敎育上に應用せんが爲には先づ第一に眞理の探討法なりとてベーコン氏の主張せる規矩を擧て之を智力の開發智識の注入に適用するを要す然る時は學問的の歸納法を以て敎育上の理法と爲す事を得べきなり若し能く氏の主張せる學問探討の方法を以て之を敎育上に適用する時は其敎育法も亦其面目を改めて以前の如く主權者の壓制の下に只空想を是追ふを事とするの風は自ら廢れて直

覺的に事物を合点し觀察と經驗とに依て能く萬物の順序を曉り簡單なる觀念より漸く進んで複雜の眞理を發見し只言辭を分解するの風自ら廢れて物の智識を收藏するに至るべきなり之を換言すれば小兒をして事物一定の眞理を知覺し曉悟せしめんと欲せばベーコン氏の求知の眞理を發見するの方法なりとて其學生に勸告せる所の方法を擧げて之を小兒に應用するに在るのみ（原註學習を以て物を發明せるの方法なりとなせるは是を以て嚆矢となすコンデルラック氏は其著「グランマリー」の總論中に此事を布衍せりスペンセル氏も亦是を以て敎授の法則なりとせり余思ふに斯の如き法則は到底是を應用することを得ざるなり）果して之を應用する時は人間の智識は決して進歩する事なかるべし倍因氏敎育論中に於て之を非難して曰く斯る無稽の言も時として敎育上敎師たる者の守るべき規則となり又見做さるる事あり余思らく斯の如きは或る特異の場合に要するも一個の權謀策に過ぎざるなりては稱讃すべき方法なるべしと雖も

コメニヤスは即ち始めてベーコンの科學的推理法を以て之を敎育上に應用したる人なり是後世氏を稱して直覺的方法を採用せる始祖なりと云ふ所以なり氏はベーコンの書物を讀て其觀念を以て己の意見となせるの

みならず尚ほ其譬喩をも摸倣したり其著せる一書を（デタリチカマクナ）と稱せしは是ベーコンの（インストーラシヨマクナ）倣ひたるものなり

第百三十七、コメニヤスの傳＝コメニヤスは如何なる人物なりや其第十七世紀に於て爲せる事業は果して如何なりしや又其敎育上に關して氏の有する宏大なる性質は果して如何なりやを知らんが爲には先づ氏の傳を知るを要す即ち氏の窮厄に陷れる事情、英國に至りて國會の氏を助けし摸樣瑞典に行く大法官オックスエンスチールンに用ひられて敎育書を著述せし所以、殊に其勉强の非常なる有樣、追放中毫も其氣象を屈するとなき摸樣、異宗家として氏の蒙りし久しき艱難及ポヘミヤのフルチックにポーランドのリサ及パタックに學校を建設せし摸樣等一々之を知るを要す然れども今是等の事情を擧げて玆に之を叙述する時は紙面を塞ぐ事夥きが故に余は一々之を擧げざるなり要するに氏の千辛万苦に逢ふて毫も屈撓せざるは能くペスタロジー其人と相似たり

第百三十八、コメニヤスの重ある著書＝コメニヤスは羅甸語日耳曼語及ゼッチ語を以て許多の書物を著したり然れども是等著書中敎育家の注意を惹くに足るべき者は僅々只二三に過ぎず而して自餘の著書は概ね哲理上の幻想に馳せ奥妙高遠にして專ら宇宙萬物の理を索るを主とせり氏の著せる許多の書物は多く湮滅して今日に存せる者甚だ鮮し余は今玆に氏の敎育上に關する普通の主義と其方法の適用とを論せる三著書を揭ぐべきなり

（第一）敎育論大全（千六百三十年頃ゼッチ語を以て著し千六百四十年頃羅甸語に改述せり）＝此書はコメニヤスの敎育上に關する主義理論及學校の組織上に關する意見とを載せたるものなり此書は實にロックの（ソートオンエヂュケーション）（名按書）ルーソーの（エミール）（名按書）と幷ひ稱すべきものなり只恨む佛語譯書の未だ世に公にせる者なきを

(第二) 語學入門＝コメニヤス自ら謂らく此書は語學を敎ふるの新法案なりと然れども語學を敎ふるの点に關しては氏は宗敎上の癖見に謬まられ羅甸の著書を學校に用ることを廢し曰く余は斯の如くにして以て眞正なる耶蘇敎の精神に基き敎育を改良せんと欲するなりと故に氏は古經文の如きは獨り耶蘇敎の精神に戻るのみならず又是を讀むに甚き困難あり小兒をして之を研究せしむるは恰も小湖中浮遊すべき微細の木皮を推して強て大海に出すが如き者なりと自ら章句を集めて之を數百篇に別ち以て一書を著したり其集めたる章句は凡ろ千個許もあり始めは簡單平易にして漸く高尙複雜に入り總て二千言の日常普通にして且必要の語を擇び專ら宇宙萬物即ち原素金屬星辰動物身體の機關及職業等をば順を追ひ序に從て之を敎ふるを主とす之を要するに氏の語學入門は即ち小兒たるものの當さに知らざるべからざる者に其意を注ぐべきを主とせる思想言辭の字典なりと稱すべきなり羅甸の攬要本の臭氣を脫して讀本の嚆矢なりと稱すべく其飮典は固より寡からざれども小兒の當さに知らざるべからざる智識を其智性に適用せる苦心の非常なるに至ては決して認ゆべからざるなり

(第三) 實物易解＝此書は氏の著書中に於て最も名聲を博したる者なり此書は小兒の其名稱を知て輒ち之を口に話すが如き普通實物の書を挿入したる者にして語學入門に繪を加へたる者と稱して可ならん直覺的の方法を始めて實際に適用したるものにして三世紀の間諸學校にて採用せる無數の挿畫讀本の摸範となりし其功殊に著きものなり

第百三十九、敎育の四階級＝第十七世紀の人は悉く羅甸文學の研究を賤みたる者と見做すべからずコメニヤスの如きは深く羅甸文學を稱揚しり然れども氏は之を稱揚すと雖も羅甸文學は自ら是羅甸文

學にして別に之を研究すべき者となしルーテルの如く之を以て初等教育上に用ふるが如き不都合はあらざりき

コメニヤスの工夫せる學校の組織は實に精緻確實にして他に之に及ぶ者なし其組織は是三世紀の間世の實際に經驗せる所を批準一定せるものなり其組織法に從へば學校を分て四種となす曰く幼稚學校曰く小學校曰く高等小學校曰く中學校是なり

幼稚學校は即ち母たる者專ら其兒子を教育し母は即ち兒子の教師なり

兒子の年齢六歳に至るまでは母の膝下に在て將來尋常小學校に於て學ぶべき學科の大要を習ふものなり

尋常小學校は女兒と男兒とを問はず六歳より入學し十二歳に退學するの制なり尋常小學校にては專ら本國語にて教授す羅馬にては尋常小學校なる語は自ら尋常語學校の意味を徴す何となれば羅馬人は本國語を

稱して「ベルナキュラ」(尋常の意)と云へばなり

高等小學は之を羅甸學校即「ジムナシュー ム」と稱す兒童十二歳より入學し十八歳にて退學するの制なり其間粗完全なる教育を受ることを得るものとす

中學校は十八歳に始まりて二十四歳に終るの制なり專ら高等の學科を授るものとす

コメニヤス謂らく成べく兒童は引續て四種の學校を經過するを要す然れども尋常小學校の仕組は兒童の其學科を履踐し終る時は粗人事普通の智識を得て若し生活の狀態如何に依り他の學校に移るを得ざるが如き事あるも毫も人事を處するに差閊なからしむるを要す

氏曰く普通教育は人事に關する一切のことを一切の人に教ふるものなり

中略 普通學校の目的とする所は男女を問はず十歳より十二歳若くは十

三歳までの間に一生を通して必要欠くべからざる智識を授け得べき者ならざるべからずと

普通學校に關する氏の解釋は實に其當を得て頗る感賞すべしとなす又氏の各市邑に於て必らず普通學校の設立なかるべからずと爲せるが如きは是亦頗る卓見なりとす即ち各村落には尋常小學校各市邑には高等小學校各都府若くは稍大なる州には中學校を設立すべしとせり

第百四十、學科の大意を教ゆるの必要＝コメニヤスの教育上に關する考案中其最も新奇にして創見に係るものは即ち小兒たる者は其幼稚の時より將來に於て當さに研究すべき學科の大要を知らしむべしとするにあり母たる者は其小兒の其搖床に在る時より其圍繞の實物に注意せしめ反省作用の力を養はざるべからずとなし曰く是の如くする時は小兒は始めて談話するの時より自ら概括抽象的の語を使用するを知る即ち(有)(無)(是の如く)(然らざれば)(何れの所)(同一)(差異)等の語意を解するに至るべきなり而して此等の無形概括の語は形而上學を學ぶの初歩にあらざるはなし又小兒は幼稚の時より水、地球、空氣、雨雪又自己身體外面の局部に關する名稱功用等を知ることを得べきものなり又其初歩の學科に於て明暗の區別、色の差異を授けざるべからず日月星辰及ひ是等天體の毎日出沒そるの摸樣を觀察せしめて天文學の初歩を教へざるべからず己の住居する近邊に於ける山岳、谿谷、曠野、河水、村落、民屋市邑等を示して地理學の初歩を授けざるべからず又一時一日一週一年春夏秋冬昨日、一昨日、明日、明後日、等を知らしめて年代記の初歩を教へざるべからず最も近日に起れる世事を反省せしめ其事情を知らしめ此事は斯々彼事は斯々に成り行けりと知らしめて史學の初歩を授けざるべからず算術幾何學統計學器械學の如きも之を知らしむるを要す是等學科の初

歩を授くるには先づ數の多少を區別せしめ十の數まで算へしめ三は二より多きを知らしめ三に一を加ふれば四となるとを知らしめ及び大小長短廣狹輕重等の語の意味を知らしめんとを要す又曲線圈線等を圖せしめ法碼にて物の多少を量り權衡にて其輕重を量る所を實驗せしめ又小兒をして自ら之を爲さしむるを要す

小兒は物を搆造し破壞するとを好むの心甚だ強きが故に此心を利用して自ら物を搆造成就せしむる時は故らに智力の作用を要するに及ばざるべし故に小兒の斯るとを爲さんと欲するに當りては之を制せずして宜く之を奬勵誘導すべきなりと

初期の文法敎授は本國語を正しく發音せしむるを主とす又略ぼ政治上に關する思想を養ふを要す此目的を達せるには小兒をして人の市邑の會議所に集まる所を見せしめ其中に評定官府知事等の役員あるとを知らしむへし

第百四十一、人民學校＝此學校は其級を六種に別ち小兒をして處世の準備と高尙なる職業に就くの準備とを爲さしむるを主とすコメニヤスは農夫職工の子弟のみに限らず中等社會若くは貴族子弟の將來羅甸學校に入るべき者をも此學校に入らしめたり即ち羅甸語學の研究は十二歲に至る迄は之を見合せて專ら初等學校に在て本國語學筭術幾何學唱歌、史學大意、博物學の概略及宗敎等を悉く履踐せしむるを旨とせり近頃高等學校に於て六年未滿の者に羅甸學の研究を見合せて專ら初等學科の事に從事せしむるの改革ありしは即ち遠くコメニヤスの工夫を追ひたる者に相違あるへからずコメニヤスの工夫に從へば初等學校にて全科を卒業すれば一ト通りの學科は悉く之を覺にて處世に差閊なからしむるを旨とす

コメニヤスの考案せる科目は寡きに失せずして却て多きに失す是コメニヤスの實際に能くし得べきや否やを省察細考せずして徒に想像に馳せたるの過なりとす故に教員の負擔を輕減せんが爲に學級を別にして生徒中の最頁なる者を撰拔し之を助教師と爲して教員の監督を助げしむべしとせり是止むを得ざるの勢なりとす

第百四十二、學校の位置＝學校外部の位置の如何及び其位置は

小兒の道德上に關して如何を省察せざる者は未だ完全なる教育家と稱すべからず此点に關してもコメニヤスの考案は實に稱美するに足る者あり氏は學校には運動場なかるべからず學校の周圍は其景色快濶舒暢ならざるへからずとせりあの事に關しては氏の前にパイプなる人ありて既に之を論じたる事あり

パイプはスペインの教育家なり其言に曰く學校の位地は宜しく流行病侵入の恐なき高爽の地を撰ふべし高爽にして健全なる土地は學問を勉強する者の爲には頗る必要なり且其土地は人民の群集殊に鍛鉄師石工機械師車輪職等の住居する如き喧噪の處を避けざるべからず然れども又其景色は愉快舒暢に過ぐべからず是學生の過度に遊歩を爲さんと欲するの恐れればなりと

パイプ及コメニヤスの名譽とすべき以上の如き考案は當時の教育家の意見とは毫も符合する所なし當時の如き尚ほいまだ所謂學校なるものなき時に於ては學校の建築法は如何等に關して考案を費す事を知る者なしプラテル曰く吾人は冬に於ては學校の室に眠り夏に於ては曠野に眠りたりと此言以て當時の有樣を想像するに足るべし

（原注プラテルは瑞典の教師にして十六世紀の人なり）

第百四十三、直覺力＝コメニヤスは初等學校に關する一般の組織

を研究せるのみならず尙ほ其敎授法を定むるの上に於ても之に劣らざる功德あり近時の敎育家が小兒の智力を養ふは實物に就て之を觀察せしむるに在りとするは是コメニヤスが既に三百年以前に開陳せる言を祖述するに過ぎざるなり

氏の曰く枯槁無益の物を廢し之に代ふるに活事物を觀察せしむるを以てすべし中略小兒を敎ふるには言辭章句及著者の述說を翻譯せしむるを廢して實物に就て其悟性を開發すべしと智識の基礎は總て實物を五官に表現するに在り然る時は其實物は容易に之を會得する事を得べきなり此事や獨り智識の基礎をなすのみならず一切言行の基礎を爲すものなり何となれば吾人は其言ふべき事柄及行ふべき事柄を明に會得するにあらざれば巧に言ふと能はず又行ふと能はざればなり又始より官能に表現せざる者は決して悟性に入ると能はず故に智慧能辨及善良讀

慣なる行爲動作の基底は能く注意して實物を視察し其異同を辨するにあり然るに今日の學校は多く此点を怠慢に附し小兒に示すに嘗て官能若くは想像力に表現せし事なき物を以てするが故に小兒は之を會得すると能はず是敎師に在ては徒らに敎授の困難を覺ゆ生徒に在ては徒らに其學習し難きに苦しみ師弟ともに勞して其功却て寡き所以なり

生徒を敎ふるには實物其者を以て官能と想像上とに印すべし物の虛影のみを示すべからず敎育は宜く實物を實際に觀察せしむるを以て始とすべし只之を口述するのみに止るべからず

コメニヤスはベーコンの主義を執りて無限感覺敎を主とするが故に敎育は一に感覺を通して施すべしとするの一方に偏して却て內省と稱する智識の他源あるあとを忘れたるものの如し

第百四十四、語學敎授を簡略にする事＝經驗的の方法を始

めて教授に用ひて得たる所の結果は文法を簡單にして無用なる法則に拘泥するの弊害を矯正するにあり コメニヤス曰く小兒には其目撃し得べき實例と實物とを示すを要す抽象的法則の如きは無用なりと氏は其語學入門の序に於て語學の研究に關する古昔の方法の誤れる所以を論述したり

其言に曰く語學を教ふる眞正適當の方法は現時に至るまで諸學校に於て行はれたるあとなきは論をまたずして皆人の知る所なり文學の研究に身を委ぬるの輩は多くは只言語の研究に永年月を費し羅甸語のみを學ぶに十年餘を費やすを常とす否斯る徒勞無益の事に一生を費す者ありと

コメニヤスは即ち實用を主とすると書物を讀むとの二者を以て斯る弊害を矯正すべきを主張せり其實用を助くる限りは其法則を酌用して言語の用法を正確ならしめ又談話をなさしめ若くは(オルヒスピクタス)の如き書物を讀ましめ以て言語の用法等を學ばしむべしとせり

第百四十五、練習と實地の必要＝其外氏の工夫せる教育法に於て緊要とすべき点は實地上の練習を重んずるにあり氏曰く職工の如きは能く實地の練習を重するを知り其徒第に職業上に關する理論を說くが如きあとなく只其師の爲す所に注意せしめ然る後に之に道具を與へて實際に練習せしむ鍛錬師たらむと欲せば親しく鍛錬するに若かざるなりと

故に小兒たる者をして器械的に其課業を諳誦せしむるが如きは無益なり宜しく自ら出精勉強して次第に之に慣熟せしめざるべからずと

第百四十六、コメニヤス著書の一般の應驗＝氏の教育に關せる新奇の妙計は頗る多く之を集むる時は其數量に數ふべけんや吾人

が今日全く近來の考案なりと信ずる方法も雖ども氏の想像内には既に之あり例へば氏の(オルビスピクタス)を著せる前に各字毎に動物の叫聲若くは兒童の耳に慣熟せる聲音と相符合せる字母を工夫したりあの工夫は即ち爰に流行せる「フオノミックメソッド」の方法なり(此方法は三十三の音聲の文字を置き語音の耳に入て生すると同一の觀念を目に入て生するの法なり)然れども斯の如き實地教授法に關する二三新奇の發明は敢てコメニヤスの爲に云ふに足らず其最も影響を及ぼせる大なる者は其著書の大體の主義にあり氏は教育は心理を基礎となし能力自然の順序に從て之を啓發せざるべからず即ち第一感覺次に記憶力次に想像力而して斷定力と推理力の如きは最も後に之を啓發せざるべからずとせり氏は體育及實地藝能上に關する教育を重するの傍ら又能く道徳上の涵養を重し開らく初等學校に於ては强健熟練の技藝者を養はざるべからざるのみならず秩序公正な慣熟せる德行信神の人を養はざるべからずと氏は或は神學上より教育を論じ爲に神秘學の空談に馳するの嫌なきにあらずと雖ども然ども能く人間生活の實境に必要なる所以の点を忘却するすあとなからしむ

氏曰く小兒は宜しく現世未來に於て其已に實用ある者を學ばざるべからず氏は學校管理上に關係する細條目の如きには敢て深く其意を致さずして頗る遠大の意見を講じ人間の氣風を養生せんことに尽力したり氏もホレイスマン氏の如く公言して若も一二年間教育上の指揮權を余に任せば余は必ず此世間を變化し見るべしと云ひしなるべし

第百四十七、約解＝(二)政治宗教及學問に關する說一變して隨て教育の目的方法を一變したり

(二)宗旨改革ありて宗教上の面目を一新しベーコンの哲學行はれて學問上の面目を一新し而して此二者相結て教育上に其影響を及ぼし空論

空說を斃し推理經驗觀察を重するの風を起せり

(三)宗旨改革以來人々其性命を救助するを己の責任となせしが故に從て書物を讀むの必要を感し其必要は自ら教育をして普通ならしむるの勢をなし專て學校の增築を催し隨て教育の增加を致すに至れり

(四)無學は禍害を招くの本なりとする概念の發生と時々身心上に蒙る處の危難とは自ら强迫教育の必要を感ぜしめたり

(五)ソクラテスの主張せる智性說廢れてベーコンの感覺說之に代るに及んで反省推理の極端に偏せる教育は一變して感覺と觀察に偏するの教育となり遂に推理の如きは全く信ずべからずとなし一に感覺の証明を重んずるに至れり

(六)普通教育說を當時の社會に適用するが爲にコメニヤスは學校を數等の階級に分ちたり是今日普通教育に關する組織の基本なりとす

第七章　教授教會「ジエスイッツ」派及「ジヤンセニッツ」派

教授教會○「ジエスイッツ」及「ジアンセニッツ」○ジエサス教會の設立○「ジエスイッツ」派の教育に對する種々の批評○「ジエスイッツ」の教育○「ジエスイッツ」教會の小學教育を怠慢と附せり○古書の研究○羅甸語及話學○「ジエスイッツ」學校の規律○競爭心の激發○罰則執行の官吏○「ジエスイッツ」派教育上の精神○能辯派○小學校の基礎科學を嫌忌す○「ゼスイッツ」學校教師及書物○佛國語の研究○綴字學の新○ポートローヤル學校教師及書物○佛國語の研究○綴字學の新法○自會の教養○ポートローヤル智育の精神○ナイユール氏の教育主義○厭世主義○厭世教の應驗○ポートローヤルの學校に於ける教義の欠典○同學校の概評○約解

第百四十八、教授社會＝佛國革命の時より國民教育は立法官の干渉する所となりしかども其以前に在ては專ら教會の監督に歸し大學校の如きも一部分は教會の權限內に屬し特に大教會の如きは殆ど教育

事業及び其指命監督等の特權を有し國家の如きは毫も其權利を有するあとなかりしなり

當時に在ては小學敎育は尙未だ宗敎社會に一定の位地を占むるに至らず但耶蘇敎會なる者ありて其目的は專ら其敎會中の子女に宗敎的の敎育を施すを主とす是耶蘇敎會はシーザーデパスが千五百九十二年にアビクノンに於て建設せし者なり然れども高等小學校の如きはジーサス敎會の設立する所にして十六世紀に至て爲に大に敎育上の事業を激與し尋て十七世紀に至て「ジェスイッツ」派の學校は益增加し又他の敎會も爭て興起するに至れり

第百四十九、「ジェスイッツ」及「ジアンセニッツ」＝宗敎諸派の中敎育事業に最も力を盡せる者は「ジェスイッツ」及「ジアンセニッツ」の兩敎會なり此兩敎會は其組織運命等に於て大に相異なるのみならず其精神に至ては尙更に大に異れり「ジェスイッツ」敎會の敎育は浮華虛榮の能力を發揚するを主とし「ジアンセニッツ」敎會の如きは確實なる能力即ち斷定力推理力を開發するを專らとす「ジェスイッツ」の學校は主として論理術及思想の練習を貴べを重んじ「ジアンセニッツ」の學校は主として責め又自ら責るをりロヤラ（按ジエスイッツ孤の學校を建立せし人）の孤獨主義は義務を人に責め又自ら責るを主とす故に「ジェスイッツ」敎會は樂天主義にして殆と耶蘇敎徒中の以彼古羅學の徒（音樂を主とする學派）と稱すべく「ジアンセニッツ」敎會の嚴格にして稍憂愁に失するは寧ろ士多西學の徒（嚴責を主とす）と稱すべきなり此二大競爭の宗派は今日に至るまで互に相對峙して毫も屈するの色なし「ジェスイッツ」派は專ら舊弊無用の學風を維持するあその風あり「ジアンセニッツ」の如きは之に反して舊弊古套を脫し花美の科學に代るに古經文を以し浮虛の敎育に易ふるに確實にして完全なる敎

育を施すを專らとせり

凡て事業の有功と無功とは其外面の成績を以て測知するあと能はず「ジエスイツ」派の學校の如きは三百年間增續して其生徒の數は殆と數ふべからざるの多きに達せり然るに「ジアンセニツツ」派の學校の如きは其運命纔二十年許にして亡滅し生徒の數は纔に數百人に過ぎざりき然れども「ジアンセニツツ」の學校は既に亡滅して其跡を留めず其敎師の如きも流離散解して其影だも見るあと能はずと雖ども其敎授の方法の如きは尙今日に存留せり故に「ジエスイツ」派は外面より見る時は尙管理權を有するに似たりと雖ども實際の勝利は「ジアンセニツツ」派の方にあり而して今日佛國の普通學校上に尙其勢力を有せり

第百五十、「ジエサス」敎會の設立

エサス」敎會を設立せる目的は徒らに禪庵的默想を主とするが爲にあらず天主敎徒の團結を組織して以て一は宣敎に依て新に敎區を得んと欲し一は敎育に依て既得の敎區を維持せんと欲するが爲なり千五百四十年法王ポール第三世の尽力に依て「ジエサス」敎會は俄に其隆盛を致し第十六世紀の中頃に於て既に佛國中に種々の學校を設立したり殊にビルロム、モリーヤツク、ロッズ、トルノン、及パーレルの如きは其設立に係る學校頗る多かりき又千五百六十一年に於て國會、大學校、及牧師等の抗拒せるにも拘らず既に巴里府中に其建設に係る學校を見るに至れりされより百年以後に至りて巴里府のみにても殆と四万の徒弟を有しクレモントの學校の如きは千六百五十一年生徒の數二千人以上に登れり上等及ひ中等以上の人々は常に是等の學校に入り其の員數は斷へず增加せり十七世紀の末に至りては「ジエスイツ」敎會の學校より百名の英傑を出せりコンデ、フクスエンバルク、ウレチール、ボーセット、ラモイノン、セグ

エル、デカルト、コルチル、及びモリア等の如きは其中の人なり千七百十年に至ては六百二十の學校と多くの大學校とを監督せり實に敎育上の頭領にして十八世紀の末に至るまで敎育上の最高權を掌握し居たり

第百五十一、「ジェスイッツ」派の敎育に對する種々の批評＝ボルタイヤ氏曰く「ジェスイッツ」學校の敎師は余に敎ふるに只羅甸語と自餘の無益なる事のみを以てせりと十六世紀に至て其說種々ありベーコン及デカルト兩氏の如きは「ジェスイッツ」學校を頌美するに過ぎたり宜しくレイプナイツ氏の嚴格なる批評を是とすべしレイプナイツ氏曰く敎育上に關しては「ジェスイッツ」の學校は中等以下に位する者と謂ふべしとベーコン氏の如きは全く之に反するの說を懷き曰く小兒の敎育上に關しては何事も宜く「ジェスイッツ」の學校に相談すべきなり其他には之に過ぐる者あるべからずと

第百五十二、「ジェスイッツ」の敎育＝「ジェスイッツ」派は嘗て敎育上の主義と目的とを論定せる書物を著はせしあとなし故に吾人は「ジェスイッツ」派に就て敎育上に關する概見の說明を求むべからず然れども學科に關する規矩法則の如きは頗る詳明確實にして能く注意を加へたり千五百五十九年ロヤラの著せる（コンスチチューション）の如きは全篇通して敎會學校の組織を說きたるものなり殊に千五百九十九年に出版せる（ラショスタジオラム）の如きは敎育の事項を論するあと頗る完全し三百年の間「ジェスイッツ」學校に於ては敎育上の法規として之を保存せり當時「ジェスイッツ」派は精神と目的とを守り而して傍ら當時の氣風に投合するとを務めたるが故に其創定せる法規に多少の變更を加へたるに相違あるべからずと雖も其實地敎育上の精神の如きは依然として變更するとなく千八百五十四年に至ても尙該敎派の主權者なるベックス

は公言して(ラシヨ)は「ジェスイッツ」派敎育に對しては不刊の法規なりと稱すべしと云へり

第百五十三、「ジエスイッツ」敎會は小學敎育を怠慢に附せり＝「ジェスイッツ」敎會は終始小學敎育を怠慢に附し且之を嫌忌したり而して專ら羅甸語の學校のみを多く設置し又時々大學校の制度に其手を出せり然れども終に小學校を設立せしことなし高等小學の如きは其設立なきにあらずと雖ども亦一種の辭見を持し其敎派に屬せざる敎員には下級の生徒を受持たしめ已等は專ら上級生徒を監督せり斯の如く小學敎育を怠慢に附し且つ上級生徒の監督權を擧て之を己に保持するは果して如何なる原因に依て然るか其授業上の力の不足なるが爲めか否抉して然るにあらず「ジェスイッツ」敎徒は普通人民に敎育を施すを好まざればなり普通人民に敎育を施すを好むは先づ己に眞心を信じ道理を信ずるの心なかるべからず又人間同等の理を信ずるの心なかるべからず然るに「ジェスイッツ」敎徒の如きは普通人民に智識あるを忌み只主治者社會にのみ敎育を敷て永く其主治權を保持せんとを期し温和多能の紳士を出すことのみを務めて毫も廣く人を養育するの心あるあとなし其某社會に限て智力の練習を施すあとあるは全く便利の爲に出づるなり斯の如きは實に人民の爲に禍害を來たすの源にして或は危險なる兵器と稱すべきなり是人民を無智にして以て永く其信仰を維持せんと欲するに外ならず其敎派の精神既に斯の如くなるが故に(コッスチチューシウン)に左の如き言あるも敢て怪しむに足らず

「ジェスイッツ」敎徒の家事に傭はるる人間は宜しく之に讀書習字を敎ふ可らず既に之を學知せる者は止むを得ずと雖更に其以上を敎ふべからず又監督長の許可なきに之を敎ふべからず傭人輩は只能く質朴從順に

して基督に奉事せば即ち足れりとせり

第百五十四、古書の研究―羅甸語及話學＝「ジェスイッツ」教

會の能く其功績を擧げたるは獨り高等學校のみなり高等學校に於ては唯羅甸語と希臘語とを以て授業の基本となし其目的は古文研究の專權を占め以て其宗教を擴張せんとするにあり其生徒をして務めて羅甸語にて記述せしめ本國語を用ふるが如きは罰あるを免れず（ラショスタデオラム）の如きは談話の際と雖ども佛國語を用ふるを禁じ只安息日のみは之を許せり故に專ら羅甸希臘語の文詞を重じ古書を解釋し文典修辭及詩歌の研究を貴びたり此外其生徒に授くるに只古書より拔抄せる者を以てし即ち麗文華章の數行を拔抄するのみにして年代時日を知るべき者は務めて之を塗抹せり然れども尙往昔の氣象即自由質朴の氣象を人民の知るとあらんも計りがたしと頻に之を恐るる心ある者の如し且古書を説明すると云ふも其趣意を捨てて只言語の末のみに偏促し生徒をして古書の思想に注意せしめずして其文詞の富麗華美なる跡にのみ注意せしむる者と謂ふべし彼輩は人民の反省力と是非を斷定するの能力とを感發する事を恐れたる者なりマコーレー氏曰く「ジェスイッツ」教徒は能く人の智力を練習して而も之をして自由思想を發生せしめざる者と謂ふべしと豈信ならずや

第百五十五、「ジエスイッツ」教會は歷史哲學及一般の科學を嫌忌せ＝「ジェスイッツ」教會は一意に虛形的の學問を重じ專ら文辭修飾の練習のみを主として實學の如きは全く之を息慢に附せり歷史の如きは其科目中より除却して用ひず只教師の羅甸希臘の攬要本を讀むに當り事の歷史上に關して解し難き條あるに逢ふ毎に僅に之を調

ぶるに過ぎず近代の歴史殊に佛國の歴史の如きは之を敎ふるとなし「ジエスイッツ」敎會の師父嘗て云へるあとあり曰く歴史の如きは之を學ぶ者は其身を亡ぼすに至るべしと斯の如く歴史を有害なりとて之を廢却するの跡あるは是當時「ジェスイッツ」派の執行せる敎育の僞造虛事なるの實あるを明見するに餘りあるなりベックス氏巧に評を下して曰く體操の如きは自然の理に協ひたりと雖も智力練習の如きは實物を同化するにあらず只單に虛飾を習練するにあるのみ

科學と哲學とを賤むあと亦歴史と異なるあとなし下等社會には全く科學を研究する事を禁じ學生の如きも古語を研修せる後に於て始めて哲學を修むべきものと爲すと雖ども其哲學研修も亦只辭章の上のみを走り無用なる議論を主とし又アリストートルの哲學書を解釋するに過ぎ

ると推測式推論とは其最も重んずる所にして事實を調査し眞正の歸納をなし實物を觀察するが如きは毫も意を致す所なし要するに「ジェスイッツ」敎會は新寄の物を嫌忌し人心の發育進歩を防害し之をして卑屈ならしむるものと云ふべし

第百五十六、「ジェスイッツ」學校の規律

「ジェスイッツ」は其敎育上に關して從來世に行はれたる規律を改革したりとて非常に之を稱譽する者あり事實彼等は其順序規律を其學校内に行はしむるを大學校に於るよりも一層甚き者ありと雖ども又一方より云ふ時は務めて生徒を娯ましめて之を學校の關門内に幽閉するとに尽力したり即ち演劇の行衆安息日の周遊、水泳、乘馬、撃劍等凡ろ生徒をして學校に在るを娯ましむるの具は一として之を行はざるはなかりーなり

然れども「ジェスイッツ」の重大なる欠典は小兒をば其家族と分離するに

あり彼輩は完全なる學生を養成せんと欲すれば小兒をして其兩親を忘れしむるに若くはなしと云ふて之に對して無限の監督權を有せん事を希へり左に擧ぐる所の一節は「ヂェスイッツ」派學校の生徒にして其後該敎派の一員たりし人が「スシュールタース」と云へる小兒に關して云へる所の言なり

其言に曰く彼小兒の「トレント」の學校にありし時一日母親來りて彼小兒に訪ひたり然るに彼の小兒は母の手を執ることを嫌ひしのみならず首を擧て見る事をも厭ひたり母は案外の事に思ひ其冷待の原因を尋ねたるに小兒答へて兒の御身を見ざる所以は御身が兒の母たるが故にあらずして御身の婦人なるが故なりと云へり某傳記作者は此小兒の言に添へて曰く是過激の答辭にあらず婦人なる者は其始めて創造されし時より備ふる所の欠典をば尙今日に存し男子を樂園より放逐する者は必らず婦

人なりとさてスシュールタースは既に神女を以て巳の實母となしたるが故に其母の死するを聞くも毫も愁歎の樣子なかりしなりと

第百五十七、競爭心の激發

「ジェスイッツ」派の學校に於ては競爭心を激發するを以て敎養の一要素なりと思考せり（ラシヨ）に曰く正しき競爭心を激發せしむるは必要なり競爭心は大に生徒の勉强を奬勵するものなりと此点に於ては「ジェスイッツ」派は大に「ジャンセニッツ」派に優れり何となれば「ジャンセニッツ」派に於ては人間の天性を誤解し競爭心を激する時は忽ち傲慢心を發するの恐ありとせしも「ジェスイッツ」派は之に反して常に生徒の自愛心を發せしむるを主とせり（ラシヨ）は連に褒賞の數を增加し即ち十字形、裝飾物又「テキュリヲン」、「プレトル」等の如き羅馬人の用ひたる勳賞を生徒に分與するの必要を論じたり最も兒戲に類する物といへども之を與ふる時は自ら生徒の熱心を感發し他生徒に

超絶せんと欲するの志氣を養成するの勢力あるものなりとせり此時に當て其品行の善良なるものに褒賞を與へたるは勿論其品行は敢て善良ならざるも他生徒の不品行を見て之を敎師に告ぐる者にも又褒賞を與へたりテキュリオン若くはプレトルの賞牌を得たる生徒は一級生徒の品行を觀察するの責ありて監督官の不在の時は代て其任を執らざるべからず之を稱して敎師の使用せる間者密告者と云ふて可ならん又生徒中罰則を犯して佛語を話す者あるも若し其生徒にして同級中又同時に佛語を話す者ありと告發する時は罪を免るる事を得たりと

第百五十八、罰則執行の官吏＝笞等は往昔に在て敎育上監督の一要素なりき此要素は學校及家庭敎育に於て頗る專權の位地を占めたりルイ十四世は其已の息子を鞭笞して之を矯正するの特權をモンシウサー侯に委任したりヘンリー四世はルイ十三世の官吏に書を寄せ

て曰く余は足下より余の息子に鞭笞を加へたりと云ふ音信なきを哀むなり何となれば余は常に足下に依賴するに余の息子にして頑固執拗なるか若くは不良の事ある時は其如何を問はず必らず之を鞭つべきを以てしたればなり又何となれば余は凡ろ人を善良ならしむるの具は鞭笞より善き物はなしと信すればなり斯の如く人を善良ならしむの具は鞭笞より善き物はなしと余の信する所以は余の彼と同齡なりし頃嘗て嚴しき鞭苔を取たる事あるが故に經驗上其利益あるを知ればなりと

「ジュスイッツ」派は罰則をば稍寬大にせんと欲するの意向あるにも拘らず實察に於ては法廷に於て用ふるが如き嚴格なる罰則をも採用せん事を務めたり又一方に於ては生徒の罪過を告發するの任を其同級生徒に負はしめながら一方に於ては罰則を自ら執行するは敎師の威儀に不相應なりと爲し俗人をして鞭笞の事を執行せしむ故に家僕門番等を擇ん

て專ら鞭笞の事に當らしむ是れ「ジェスイッツ」派の學校に於ては皆然らざるはなし（ラショステオラム）は頻に寛和に從ふべしと說くにも揭はらず罰則執行者中に於ては毫も謹愼を加へずして頗る亂暴の處置を爲す者あり玆にセントシモーの一話を擧くべし

日くボフラー侯の長子は其齡十四歲姿容頗る美にして且將來に望ある小兒なり巡査長デアルシェノンの二子と「ジェスイッツ」の學校に寄宿し居たり余は此三子の如何なる不都合ありしやは知らざれども「ジェスイッツ」學校の師父輩は貴權士の權勢を畏れざるの樣を示さんが爲に頻りにボフラー侯の小兒のみを鞭笞し他の二子の如きは之と同一の不都合あるを見るも毫も之を笞つ事なかりきボフラー侯の小兒は其笞うたるるの苦痛に堪へず遂に病氣となり后四日を經て死去したり　中略　今世間の人に「ジェスイッツ」の學校に對し頗る其不都合の點を喋々するも雖ども

此一事に關しては何人も一言を發する事なかりしなりと

第百五十九。「ジェスイッツ」派教育上の精神＝「ジェスイッツ」派の敎育を貫ぬく精神は全く今日の敎育上の主義と相反し無限の從順自由思想の抑壓のみを專らとせり

其言に曰く己の爲さんと欲する慾念を廢棄するは死者を蘇甦せしめたるより其功更に多し吾人は天主敎を信するの深き縱へ白色の物を指て黑色なりと云はるるも甘して之を奉信するが如き度に至らざるべからず吾人は神を信ずるの厚き若し大海を渡るに舩なく神之に命して一片の板に乘して渡るべしと云るる時は甘じて之に從ふが如くならざるべからず若し上帝にして無法の人間を撰て主君となす事あるも吾人は上帝の指命なるが故に能く其命する所に從はざるべからず又人間たる者は上帝の代人たる宗敎師父の命する所に從ふあと恰も死人の毫も不平

なきが如くならざるべからず又元帥の其意の儘に扱ふ指揮杖の如くならざるべからずと

智育の如きは全く虚僞浮華を主とし成るべく智心を提醒せずして外事に其心を向けしめ訓話章句の末に注意せしめて道理を思考するの暇なからしめ智力の活動を抑へて專ら記臆の能力を發達せしめ一語にて言へば蠢愚の境を解脫せしむるを務むると雖ども之をして心意自動の能力を遏止するは是即ち「ジェスイッツ」派の敎育上に執る所の法なりとすベルソット氏曰く「ジェスイッツ」派の敎育法は左の如し即ち歷史の如きは只事實と表とのみに限り廣く世事に關するの智識を授くるあとなし其事實と雖ども餘り多きに渉る時は之を省略減殺して只大體を授くるのみ哲學の如きも所謂經驗的の者のみにしてデマイストル氏は之を稱して虚無の哲學なりと云へり是其淡泊無味を主として人の之を嗜むの心を生ぜざらしめんとを務めたればなり有形學の如きは其物理を尋究するの精神を發起せしめざらんあとを務めて只遊戲中に之を授くるに足るべしとし文學の如きは古人の著書を說明講釋するに過ぎず要するに「ジェスイッツ」の主義とする所は只人心を娛樂せしむるを務めて智力の發暢を押制するを主としたるものなりと

第百六十、能辨派＝「ジェスイッツ」派及其之を贊翼する黨派と「ジャンセニッツ」派及其之を翼贊する黨派との中間に立つ所の一派あり之を能辨學派と稱す此學派は一方に於ては器械的に失するの敎育を攻擊し又一方に於ては「イクナチヤスロヤラ」の創搬せる浮華の敎授法を破潰し巧に改良を加へて敎育をして稍高尙深遠の域に近づがしめたり此學派は千六百十四年ベル氏の創始する所にして其設立に係る高等學校は擧ち鉅大の數に達し殊に千六百三十八年彼の有名なるジェルリーの學

校を設立したり「ジェスイッツ」派の中には學士の有名なる甚だ鮮しと雖ども十七世紀の能辨學派中には有名なる敎師の數甚だ多し就中ペレラシーペレトマシンの如きは其尤なるものなり能辨學派の徒はペレトマシンを絶倫の神學者と稱す氏は千六百八十一年より千七百九十年までの間に語學哲學及文學を研究する方法を説明する書を著したり又修字學の敎師なるマスカロン及マシロン歷史の敎師なるペレレコイント、ペレレロングの諸氏の如きは其尤なる者なり是等の人々は宗敎に對する熱心と自由を愛するの情とを兼備し從來幽閉せる學校內に多くの空氣と光線とを注入せんことを企望し歷史上の事實科學の眞理を研究することを嗜み自由主義を主として眞の耶蘇敎義に叶へる敎育を施おし迷信浮華の風を矯正せんことを企望せり要するに能辨學派の敎育法は近代に行はるゝ敎育法中の一法として見るに足るべきなり

吾人は今玆に能辨派の敎育法を細說せんと欲すれども紙幅に限りあるを以て只一二緊要の點を擧ぐべきなり

能辨學派の他に超絶する所は眞正に眞理を愛するに在りペレラシー氏曰く吾人の眞理を愛するの甚しき一日の短きを憂ふるなり即ち之を換言すれば眞理を研究して得る所の快樂は吾人をして飽くことを覺へざらしむ能辨學派は文字を愛することを知り其主權者は又務めて之を愛するの心を養成せんことを務む若一人ありて科學の深奥を究めて其才絶倫なる時は一切の義務を免るゝことを得たりと抑文字を愛するの深きは恐らくは能辨學派の徒に及ぶ者はなかるべきなり

能辨學派の言に曰くペレトマシンは暇ある毎に古語をのみ研究せり然れども佛蘭西語を以て羅甸語の犧牲とはなさざりき羅甸語の如きは第四年期を終るまでは敢て之を課せずして四年期の間は專ら佛蘭西語を

以て歴史を敎ゆるごとゝなせり從來一般の歴史殊に佛蘭西の歴史の如きは大學校と雖とも大に怠慢に附し來りしが能辨學派の如きは務めて之を課せりと同時に又地理學を授け學室の如きば常に大なる地圖を備置けり科學の如きも又課目の一たり左に擧ぐる所のペレラシーの言の如きは「ジェスイッツ」派師父の決して思想せざる所なり其言に曰く余は錬物所に入る事を甚だ快樂に思ふなり余は如何なる所に在るに揭はらず解剖上に關する演說ありと聞く時は必らず行て傍聽し人身上至重なる部分の解剖を實驗せざる事なし中略余は代數と算術の二科ほど世に大用を爲す者はなかるべしと思ふなりと

哲學カルテシアン派の哲學は「ジェスイッツ」派の痛く誹毀讒謗せる所なるが此哲學は能辨學派の中に大に流行せりアンジァー學校の管理者の言に曰くカルテシアン哲學派を以て一種の流行病なりとするも吾人の仲間中にて之に感染する者二百人以上も之ありと中略千六百七十三年ゼビン侯の言に曰くカルテシアン哲學派は能辨學派の師父輩をしてデカートの哲學を敎ふることを禁じ隨て血液の循環するものたるごとを敎ふるごとを禁じたり

請ふ是より能辨學派の使用せる罰則の進歩改良せる証據を擧げんにペレラシー曰く生徒を御するに鞭笞の外尙他に種々の方法ありとす生徒をして其本務を守らしむるに當り之を慈愛し之を恐懼せしめ又勝敗榮辱の心を活用するが如きは鞭笞を用ふるより其功更に大なるものあらんとす

能辨學派は固より責板鞭笞を用ひざるにはあらず之をして罰則の一部分と爲せしは已ゆべからざるの事實なりとす然れども同學派は温和謹愼の精神を主とし且生徒の激怒するごとを恐るゝが故に實際に之を使

用するが如きは甚だ稀なりとす

氏又曰く學校の小社會を支配するには政治權の如き種類あるを要す即ち生徒の意向に從て之を誘導し賞罰の如何なる應驗を及ぼせるやを豫見し之を巧に活用するに際しては必ず政治權の如きものなかるべからず小兒と雖ども命に從はんより寧ろ死を取らんと決心する時は頑として動かざるものなりと又曰く能辨學派の能く嚴罰を施さずして敎師の權利を維持するの容易なりし所以は一人の敎師の受持つ所の級始終同一なればなり「ペレトマシン」の如きは一人にして文典修字哲學數學伊多利語及スペイン語の敎師たりき斯の如くなる時は敎師は自ら敎授に身を入るゝに至るべしと雖ども又一方より云ふ時は終始一人の受持法は稍虛飾に屬して生徒と敎師とが實益を爲す事なし敎授上の大法は各人別に各級を分擔するにありと知るべし

第百六十一、小學校の基礎 ‖「ジャンセニッツ」派は其協會を組織せる始より少年の敎育には非常に熱心せる實跡を示せり其協會の開祖なる「セントサイロン」の言に曰く敎育は必要缺くべからざるものなり中略余は汝等の余が小兒に對する愛情の深きを推察するあたわらん余は汝等の余が小兒に對する愛情の深きを推察するあたわらんを企望するなり中略小兒の當さに養育せざるべからざるは猶上帝に奉事せざるべからざるが如しと

「ジャンセニッツ」派の一千六百四十三年にポートローヤル及近國に尋て巴里府に小學校を建設せしは即ち以上の如き小兒を慈愛憮育するの赤心に基きたるものなり彼輩は固より世間を管轄し勢力を擴張するの心なく偏に小兒を善良に養成せん事を主としたる故に注意の行屆かざらんあとを恐れて極めて小數の生徒を入校せしめたり然れども其後間もなく「ジャンセニッツ」派に對する嚴刑の來りたるが爲に其敎育事業を繼續

するあと能はず千六百六十年「ジャンセニッツ」派は首尾よく「ジャンセニッツ」派の學校を閉ぢ其教師を放逐すべきの命令を國王より得たるが爲に「ジャンセニッツ」派の教師は或は追放され或は入牢されて頗る殘酷の所置に逢へり只纔に少年月間に於ける教育上經驗の結果を記錄するの間隙を得たるはポートローヤルの學校のみなり

第百六十二、ポートローヤル學校教師及書物＝ポートローヤルの學校教師は殘酷の運命に際會して其職を執ること匿に五年間に過ぎずと雖ども其盡力に依て當時の學校教師は尚佛蘭西教育の善良なる説明家たるを失はざるは豈に奇怪ならずや其教師の初位を占きべき者は道徳學兼論理學者なるナイコールなり氏はポートローヤル派の論理書を著せる一人にて又ポートローヤルの學校に於て哲學と古語とを教授し千六百七十年(セイジュケーシウンヲフプリンス)と稱する教育書を著はせり次をランセロットとなす氏は文法家にて羅甸希臘伊多利及スペイン等の國語練習方法を説明せる書を著はせり次をアルイルドと爲すこの人は熱心なる神學者にして論理書獨乙文典書古學研究軌範を著はせりデサシー及グイヨット二氏の如きは其名以上諸氏の如くに高からざれども是亦「ジャンセニッツ」派中の名士なり二氏の翻譯書は頗る多し次をコーステルとなす此人は小兒教育法たる書を著はせり次をバーレットとなす耶蘇教育書の著書なりシャンクエリンパスカルの著せる小兒教育法の如きも亦此等の目中に入るべきものとす以てポートローヤルの教育法の頗る活潑なりしを見るべきなり

第百六十三、佛國語の研究＝先づ始めに本國語を研究すべし

と勸告する教師輩は概ね人の稱讃を受けざるはなし「ポートロ・ヤル」の小學校に於ても其教師輩は始めに本國語を研究すべしと主張せりアベフローレー氏の曰く吾人は今日に在ては最初に羅甸語を學ぶの風あり何となれば羅甸語は之を佛蘭西語と比較する時は其發音容易なればなりと氏は斯く云ふと雖も及ぶべき丈けは早く小兒の理會し易き佛國語の書物を授くるの至當なるあとを承認せるが故に始めに羅甸語を授が如きは氏の不滿とそる所なり然れども「ポートロ・ヤル」に於ては最初に佛國語を授くるの至當なる事を承認し小兒をして理會し得べき物を授けて明瞭精密なる觀念を得せしむるを主とするが故に始めに羅甸語を授くるの非理なるあとを發見せりコメニヤス氏戲言を以て之を評して曰く本國語を教ふるの前に羅甸語を教ふるは猶未だ歩行するとを知らざる小兒に強て馬に乘るを教るが如しとセントヒーユポー氏又曰く

解すべからざるあとを教へて未だ知らざる事をしらしめんとするは徒に小兒を強迫するに過ぎずと「ジャンセニッツ」派は徒に解すべからざる事を授くるを慶して善良なる羅甸語の飜釋書を以てせり又羅甸語にて書するを習ふの前に佛蘭西語にて書するを習はしむ又小兒の既に學習せる所に就て問をかけ其追憶する所を以て簡單なる物語書簡文等を綴らしむ

第百六十四、綴字學の新法

「ジャンセニッツ」派は常に學科を簡單容易ならしむるを主とするが故に讀書の方法を改革せりアルノルドの著せる普通文典書の第六章に曰く今日讀書の難き所以は各文字は各個に固有の名稱を有しながら他の文字と聯合する時は別に一種の音を生ずるに在り例へばフライ(fry)なる一連字を讀むに當りエフ(f)アル(r)ワイ(y)と綴らざるを得ず是大に生徒の思想を錯亂す故に其發音の

名稱のみを敎ふるを善とす只母音と二重音のみを發音せしめ子音の如きは一連字若くは一語中に於て同一の母音若くは二重音と交互に相連結せしめざるを要すと云へり

右の方法を稱してポートローヤルの讀書法と云ふジヤンクウリンパスカルの書簡に據るに右の方法は全くパスカル氏の考案に出でたる者の如し

第百六十五、自省の教養＝「ジェスイッツ」派の方法と「ジャンセニッツ」派の方法と相異なる重なる要點は「ジャンセニッツ」派に在ては秀逸なる羅甸語學者を出すを主とせずして智力の養成を主とするにあり專ら小兒の斷定力自省力を養成し依て以て物理を思考會得せしめんとするにあり敎科書中の一語と雖ども其意味を解得せずして空しく經過するあとを許さず務めて小兒の智力に適合すべき者を擇て之を授け猥に

之を強迫することを爲さずポートローヤルの文典は佛蘭西語なりナイコール氏曰く將さに學ばんとして現に未だ知らざる言語に就き先づ其法則主義を敎ふるが如きは愚の至なりランセロット氏は其著せる敎授法といふ書に於て文典の研究法を省略減殺し之に附言して曰くロアスの確言に敎ふるあと少ふして習ふこと多からしむべしとあり余は深く此言を信ずるものなり若小兒にして少く文法上の規則を知り得たらんには宜しく實地に就て之を練習せしむべしと

ポートローヤルの文典は專ら書物を讀むの際に規則を知るを主とす敎師は書物を敎ゆるの際其中の二三章を擧げ之に就て文法上の規則を口述す斯の如くする時は徒に文法上の無味冷淡なる法規に拘泥せずして活潑愉快の興味中自ら文法の規則を覺らしむ此方法は頗る秀逸の方法

なりとす何となれば能く心意の運用に適ひ智力の進歩を促かせばなり
又何となればデスカード氏の云へるが如くその方法に據る時は既知より未知に進み簡單より復雜に進む事を得ればなり

第百六十一、ポートローヤル智育の精神

ポートローヤル學校は科學をば貴重なる者として之に身を入れたる事なし同學校に在ては敎育を以て單に斷定力を養成するの一方便となせりナイコール氏曰く科學は宜しく推理を完からしむるの器械として用ふべきなりと故に歷史學及科學的智識の如きは敢て眞正の價値なき者となし只正直公平聰明の人物を養成するの方便として之を用ふるに過ぎずナイコール氏又曰く科學の如き無用なる者に心醉せんよりは始より科學なる者あるを知らざるを善とすと氏嘗て數理學者の土星の周邊に橋梁穹形の懸垂するを知るは世に之より貴きはなしと云へる言に批評を下して曰く斯るあとを知るの無益なるを知らざるを要すと

之に反して「ジャンセニッツ」派に於ては其學科中より只記臆力及虛僞の想像力を練習するに過ぎざる者は悉く之を除却し羅甸の詞章の如きは之に注意するあを寡く「ヴェルシウン」を先にして「ゼーム」を後にし且口述の「ゼーム」を主として記述の「ゼーム」を次とせり（按「ヴエルシウン」は羅甸語を云ふ「ゼーム」とは佛語を羅甸語に譯するをいふ）生徒を敎ふるに言語の末に拘泥せず隱昧なる主義に安んぜず偏に事物の明瞭なる觀念を會得せしむるを主とす

第百六十七、ナイコール氏の敎育主義

デュケーシウンオフプリンス）に於て簡單に敎育主義を叙述したり曰く敎授の目的は生徒の知力をして其達し得べき頂点に達せしむるにあり之を換言すれば貴族と平民とを問はず其能力に應じて適當の敎育を受くるの權利あり曰く學科の難易は小兒の智力發育の度に準せざるべか

らず英雄豪傑と雖ども割合に智力の乏しき者あり人間の心中には明暗の兩所あり小兒の如きは大底は暗所のみにして明所甚だ鮮し故に小兒の敎育は此暗所を照らして漸く明所を弘め其知らんと欲する物を以て之に投ずるに在りと知るべし曰く小兒は常に其智識を五官より得るが故に敎育は成るべく五感に訴へざるべからず聽官視官を通して心意に達せしめざるべからず故に地理書の如きは最も小兒に適するの學科なり宜しく大市邑の圖を畫て之に示すべし若し小兒にして歷史を學び終りたらんには宜く地圖を示して其場所の在る所を示すべしナイコール氏は以上の外に器械武器古衣服帝王及び其他有名なる人の肖像を示すべしとせり

第百六十八、厭世主義＝人は惡しき者なり人間の天性は腐敗せる者なりとは是「ジャンセニッツ」派の著せる諸書より吾人の耳に達する絶念の叫聲なりセントサイラン曰く小兒の未だ生れざる前より惡魔は其靈魂を把持せり又曰く吾人は靈魂の爲に前り常に之に注意するあと市邑を固むる番兵の如くならざるべからず何となれば惡魔は常に其周圍を巡回すればなりと

又「ジャンセニッツ」派中の某氏曰く小兒の理性を有するに至るや否や其心意は曚昧薄弱に陷り精神上の事物を退けて之を會得するあとなく目は害惡を見るを喜び五官は汚穢を受け易く惡に傾て底止する所を知らざるに至るなりと

ヴハレット氏曰く小兒は全く害惡に陷りて尙深く惡に進まんとする者なりと思はざるべからず小兒は理性の支配を受けざるが故に其身は害惡に誘ふべき事物を以て自ら快樂を感ずるものなりと

第百六十九、厭世敎の應驗＝人性固と惡なりとする說より二個

の反對せる應驗を生じて二樣に人間の品行を指導す即ち一方に於ては汚穢不德の人間を警戒し一方に於ては災害に陷れる者を愛憐するの心を生ずポートローヤルは第二の應驗を受けて頗る小兒を愛憐撫育するの風を生じ精神上の禍害に陷れる者を救助するに決して勞力費用を惜む事なかりき

性惡の敎義はまたポートローヤルに於ける敎師輩の熱心を增し敎師を促がして生徒の精神に注意し禍害の萌芽を破却するの心を生ぜしめたり今小兒の德育を司どるに當り人性の善なるを深く信して敢て不正邪惡に傾くおとあるべからずと見做すが如きは頗る危險のおとなりとす何となれば心中斯る說を懷く時は自ら小兒に多分の自由を與へ小兒をして其爲すが儘に任せよと云ふ諺を實行せしむるの恐れあればなりと反して其天性を惡なりと見做す時は期る過失は自ら鮮し何となれば小兒を放任するの危險なるおとを知るが故に絕にず之に注意し其意の儘に任するとなく之に敎育を施すに勞力を惜まざるべければなりと

謹愼、耐忍、溫和の三者はポートローヤル學校の主義とする所なり刑罰の如きは之を用ふる事甚だ稀なりセントサイロン曰く談話するおと寡ふして寬恕するおと多かるべく生徒の善を祈るべしと學校の秩序を維持するに只退校を命ずべしと恐喝するのみにて足れりと而して實際不品行にして他生徒に惡習を傳播するの恐れある者は之に退校を命じたるおとありと雖とも敎師輩の謹愼なる止むを得ざるの過失は務めて之を寬恕し又人間は固と天帝の創造に係ると云ふ義を承認するが故に慈愛の中自ら尊敬の意を交へたり

第百七十、ポートローヤルの學校に於ける敎義の欠典

＝「ジャンセニッツ」は厭世主義より生する自然にして且危險なる結果を

免るゝあと能はず其謹愼は嚴格に失し鄭重威儀は厭ふべき虛僞に陷り生徒たる者は互に相親むべからずとし互に相親むは耶蘇敎徒たるに相應せずと信じ小兒は互に相尊敬し毫も不禮を加ふる事なく嚴然たる矮小貴人の如く頗る笑ふべきの樣子あり然れども之が爲に大に和睦親愛の情の發達を害したり

「ジャンセニッツ」派は孰も隱遁主義を奉じウワレットの如きは踏舞會は汚醜の場所なりと云へりパスカルは一切の快樂を拒絶し只幾何學の理を思考するを以て快樂なりとせりラランセロットは其已の門弟たりしコンチ王を演劇場に連れ行くあとを厭ひたり

ポートローヤル學校の大欠典とすべきは自愛の心を生せんあとを恐れて故らに競爭の精神を壓制したるにあり人の能力才智を頌讃すべき者は只天帝のみなり若し天帝にして人間の靈魂中に與ふる良善なる物を以て爲ることあらば宜く默して天帝を稱讃すべきのみと斯の如くにして務めて高慢心を抑制したり然れとも高慢心の生ずるを以て恐るべしとなさば怠惰心の如きも亦恐るべきにあらずや褒賞を與へず又之を譽るあとなくして務めて高慢心を抑制する時は遂に小兒の天性なる怠惰心を生して事に勉强する事なかるべしポートローヤルの學校派なるパスカル曰くポートローヤルの學校生徒は榮辱の刺激なきが故に自ら冷淡の狀態に陷れり

第百七十一、ポートローヤル學校の概評

ポートローヤルの敎師は或點に於ては名其實に過ぐる所なきにあらずと雖ども一般に敎育と慈愛とを以て已の任と爲すに至りては頗る感心すべき事なり宗敎に對しては誠實にして熱心なるべく又能く人間の尊敬すべきを知り信實に之を實行して他の强迫を待たず人性の危險なるを知り

て能く之を慈愛憮養し必竟深く宗教に皈依して他の靈魂を救助するを
とを務む之をポートロヤルの教義となす然れども「ジャンセニッツ」派
の他に卓絶せる所以は教授法と古文研究とに在りポートロヤルの教
師輩は善良なる古學者にして能く是非を判斷するの明あり「ゼスイッツ」
派の如く徒に虚飾に馳するをとなし智育の如きは是非を明辨し正直な
る人間を出すをとを主とす教育學史家のパルナイエル氏曰くポートロ
ヤル學校に於ては學科を簡單にして而も易きに失する事なく興味を
主とし嬉戲に陷るをとなく又小兒の心に會得せる者のみを記憶せしむ
るを務めたりと

第百七十二、約解＝(一)三大教授教會の歴史を按するに教育を以て人間の運命を司るべき大勢力ある者なりと見做せる實あるを見るなり

(二)ロヤラは耶蘇新教徒の民間に其教育を擴張するの勢力を防がん爲に舊教の熱心家を團結し之と道德宗教及政治權の擴張を競爭して遂に一切の耶蘇教國に教育制度を普及したり

(三)極端に馳せて中庸を得るの難きは自然の勢にして事物に免るべからず「ジェスイッツ」派は徒に虚飾華美に走り罰を重くして過度に競爭を促がし「ジャンセニッツ」派は人性の惡に傾き易きを恐れ務めて誇傲の心を抑制せり

第八章　フェヂロン

十七世紀の教育○フェネロンは如何にして教育者となりしか○女兒教育論の批評○女兒教育と關する辯見を排す○人の天性は善良なり○兒童の蒲弱ある事○小兒の好奇心○間接教授○授業は快樂たるべきを要す○寓言及歴史○道徳的及宗教的教育○女子の勉むべき研究○ランベルト孃○ボルゴン侯の教育○好結果○修身科○歴史科○フェネロンは臨機應變の教育法を用ふ○教授の趣意を轉換するなと○ボルゴン侯教育の結果○「テレマチヤス」○ボウスエト及フェネロン○教育の範圍限界○約解

第百七十三、第十七世紀の教育＝第十七世紀に當り教授教會の外に亦幾多の獨立なる教育家及思想家あり是等教育家思想家の思考し經驗せる事柄は史籍に載せて今日に傳はれり此等教育家思想家は僧俗社會に多く即ち多く王室の教師たり大凡君主國に於て最も重要の事務は太子の教育より大なるはなしとせり當時又哲學者なる者ありて人性

の如何を研究し推して以て教育上の主義を反省考察せり余は今當時教育上の細目を詳說するおとを止めて十七世紀の教育を支配し且後世紀教育上の改革に對し之が準備となりし緊要なる主義と方法とを擧げて讀者に知らしめんと欲するなり

第百七十四、フェヂロン（千六百五十一年生千七百十一年死）＝フェヂロンは佛蘭西の文學社會に於ては頗る重要の位地を占めたる人なり天才ある各種の事に長し而して其中教育者としての効は最も重要にして且著明なりと始めて佛蘭西教育法に關する書を著はせし者は即ち氏なり爾來氏の考案を遵奉するの學者頗る多きが故に余謂らく氏を以て教育家中の領袖と稱して可ならんと

第百七十五、フェヂロンは如何にして教師となりしか＝フェヂロンの女子教育論は千六百八十年ボヌビルリア侯と其婦人との

請求に應して著はしたるものなりとは能く人の知る所なり同侯夫妻には八人の女子の外に數多の男兒を持てり氏は此等男女子の爲に同侯夫妻に勸告して敎育書を著はしたり而して其敎育書は固より右の如き家庭を目的と爲したる者なるが故に千六百八十七年までは世に公にせざりしなり氏は千六百八十八年に當り其齡纔に三十歳なりしが既に新天主敎會の事務を取扱ひて自ら敎育上の事柄に關する經驗を有したり此新天主敎會設立の目的は少年新敎徒の舊敎に改宗せる者を留存する所にして又間々脫力を以て少年新敎徒を拘留する所たりしなり只惜むらくは氏は天主敎徒の如き迷信者の中に居りて腕力黨の助手となり壓制者の機械となり且ナントの布告改正の準備を自ら爲したる位なるが故に其得たる所の經驗も自ら痕跡を脫するあと能はざるを若し然らずんば氏の名譽は更に盛なりしならん又余は氏の著せる女子敎育論が天主敎會

の童男童女を其母より引離し妻を其夫より引離し竝に固く之を幽閉禁錮するが如き侷促たる社會の爲に工夫せるものならざらんには一層善良なりしならんと想像せざるを得ず併し又一方より云ふ時はフェチロン の敎育主義は吾人の期するが如くに純正ならずと雖とも亦局量と壓制との跡あるあとなく却て女子敎育論の如きは寬大を主とし餘裕あるを貴び要するに進歩の精神を以て一貫する者と謂つべし

フェチロン は其敎育論に叙述したる主義を擧げて之を實際に應用するの機會を得たり即ち千六百八十九年八月十六日にボルボン侯の師傅に推薦せられたり當時ボルボン侯の監督者はポーヴィルリアス 侯にして僧侶フルーレン氏は其小傳たりフェチロン 氏は千六百八十九年より千六百九十五年に至るの間セントシモン が生れながらにして殘虐なりと呼べる太子の敎育を引受けこれを顧視涵養して非常の効を奏し遂に性惡の

太子をして多藝にして且殆ど聖賢とも稱すべき一人物たらしめたり氏の著せる敎育書中の小說集死亡問答、上帝存在論及び「テレマチヤス」等の諸書の如きは皆王族の爲に著はしたるものなり殊に「テレマチヤス」の如きは佛蘭西文學書中の最も評判善きものなり

氏の敎育事業を演習するに當てや偶然に興起し來る事情は皆氏の志願を助くる者にあらざるはなし故に氏を評して氏の運命は先天より敎育事業に定りたる者と稱して可なり其心の柔和にして節操なる能く兩親に類し温厚多聞にして且往古の事物に通し文法歷史を研究して其奥義を曉り獨裁專制の治下に在て能く着實なる自由思想を有するが如き皆以て氏をして佛蘭西敎育の先導者たり先覺者たらしむるに足るものなり

第百七十六、女子教育論の分解＝此巧妙なる書を評するには

先づ其全篇を通讀するを要す匆卒に之を分解するは未だ其宜を得たる者なりとするをとを得ず何となれば氏の渾々と溢流する思想を要約して之を二三の小論局内に容るることと難ければなり而して氏の論鋒流暢にして放縱の跡あり思想を叙するに冗長に失して反覆厭ふべきの痕なきにあらず女子敎育論は全篇を十三章に分つ而して其叙する所の趣意は大體三種となす第一及第二章は批評論にして專ら女子敎育上に關する普通の欠典を擧ぐ其第三章より第八章までは敎育上普通の觀察を擧げ其論定する所の主義と方法とは之を男子の敎育に適用するをとを得べし而して其第十一章より末章までは專ら女子の有功無功及其義務事業等に關して論じたり

第百七十七、寺院教育の批評＝フェチロン氏は其女子敎育論の

起首に於て自由寛大の敎育主義を善とする旨を述べて曰く余は斷言すら

く汝の視て以て最も善良なりと思惟する寺院と雖とも此に汝の女子を托するは却て汝の傍に置くに若かず又曰く寺院の管理其宜を得ざる時は女子は浮薄を以て美徳となすに至るべし抑浮薄の如きは女子を毒するの最も甚しきものなり又此寺院に居て徒に俗世界の事を想像し一に快樂慕ふべきの天地なりと迷想して之を欽羨し却て失望と悲哀との塲所なるあとを忘れしむるの實ありと又曰く以上の如き寺院は彼人の子を戒ふと實に甚きが故に余は俗世界より却て斯の如き俗寺を恐るる者なり之に反して其管理宜を得能く其規則を固守する所の寺院は却て高貴の女兒を幽閉籠塾し全く世界の事情に暗く其庵を出るや恰も深穴の裡に成長せる人の突然日光の赫灼たる塲所に出でたるが如く其明暗倏變の際炫せざる者殆と稀なりとす

第百七十八、女子教育に關する癖見を排せ＝女子教育の

癖見を排するの點より見る時は氏の著せる教育書は寧ろ母たる者の爲めにせりと稱して可なり女子は專ら家政の事に任するの運命を有する者なるが故に氏乃ち曰く若し其妻たる者にして苦境に沈淪する時は其良人たる者獨り快樂なるあとを得べきやと然らば吾人は女子の教育を怠慢に附するを止め且之を怠慢に附するを是なりとする癖見を排せざるべからず或は教育ある女子は浮薄虚飾に陷るものなりと云ふ人あり固より無益なる學術を研究して徒に誇衒の心を生ぜしむるが如きは女子教育の目的とする所にあらず女子教育の目的とする所は家政を治むるに適當ならしむるに在り又女子は男子より智力の薄弱なるものなりと云ふものあり然れども是れ決して女子の教育を無用なりとするの理由とするに足らずして却て其智力を増益せざるべからざる所以を証するに足るべし或は女子には決して世間の事を知らしむべからずと云ふ

ものあり フェチロン 氏は之を駁して曰く世間は決して妖怪にあらず家族の集合せるものなり故に女子も亦男子に劣らざる世間の義務を負ふものなり彝徳の女子に欠くべからざるは猶男子に缺くべからざるがごとし

第百七十九、人の天性は善良かり＝耶蘇教徒に二種あり一は非を遂ぐるを是とするの教義を奉する者是なり前者の教義は兒童をして益々深く罪に抵らしめ徒に害悪を重ねしむるに過ぎず即ち重罰を課せざるべからざる悪兒童を養成するに過きず後者は乃ち然らず過を改むるを善とするが故に従て一定確實の方向を有するごとなく其本性は毫も阻遏するに及ばす只其方向を定むるを要するのみ フェチロン 氏は此後説を執り兒童の自愛心は決して愛とするに足らず自讃心も之を阻遏するを要せずとせり氏はまた往古の兒童に稍自由を與へたる教育法を追羨せり要するに氏の人性の善なる説を主張するは氏自ら楽天教の主義に感染し居るが故なり而して或は時に人性を過讃過稱するの嘆なきにあらず

第百八十、兒童の薄弱ある事＝フェチロン 氏は小兒の無罪無害なるごとを能く承認し居るの傍ら又身躰の虚弱なるごとをも承認し居たるなり其小兒の養育を司どる者の爲に其心得を説て曰く幼稚者を取扱ふに當り最も注意すべきは其健康なり其食物を精撰し閑散以て之を率ゐる時は其身躰に清鮮なる血液を注入するごとを得べし又曰く今一つ注意すべきは教育を以て其身躰を牽駐せずして暫く之を放楽し以て其官能の發育を許すに在り又曰小兒に在て其智力の薄弱なるは其原因多くは已の注意を定着するごと能はざるに在り又曰く小兒の心は恰も燈火の風を受けて其火焔の閃々として終始一定せざるが如し又曰く其れ

此の如くなるか故に過度に之を壓制するは極めて不可なり宜しく其然るべきの機會を伺ひ漸次に之を訓練すべく即ち之を拔かずして宜しく其長するを助くべきなり

第百八十一、小兒の好奇心—實物教授＝

其注意の泛々として定着する所なきは是れ其進歩の大障害を爲す者なりと雖とも亦其進歩の大幇助を爲す者一あり即ち小兒の自然に備ふる所の好奇心なりとすフェヂロン氏は小兒の好奇心は以て其進歩の大助と成し得べきを合點し居たり余は今氏の實物教授の方便に賴て此好奇心を練習開發せるあとを得べしと説明せる著名の一節を抽き之を左に掲出すべし

其一節に曰く小兒の好奇心は其天性に備ふる所にして以て教授の先鋒として見るべし決して此先鋒を棄てて利用せざるあとなかれ例へば田舍に至て磨墨房を見る時は直に其何物たるを知らんと欲す其知らんと欲するの好奇心を利用して是れ人間の需要する食物を製造する所なりと教ふるあと甚だ容易なるべし又耕作者を見る時は其何事を爲しつつあるかを知らんと欲するならん即ち宜しく之に説明すべきなり麥を播するの方法は如何其地上に繁殖する所以は如何其間に應して直に之が説明を爲すべし市府に出づるは種々の工藝場を見て質問し品物を賣る所を見て質問し目に見耳に聞く者輒ち發して質問となるは是れ小兒の好奇心か然らしむる所にして即ち實物を見聞して自ら教へ教授をして容易ならしむるなり故に小兒の教育を司る者は斯る問を受るを喜ぶの躰を小兒に示すべし然る時は汝司教者は小兒をして識らず知らずの際に人間の需要に應ずる一切必需品の成る所以は如何等を教ふるを得べきなり

第百八十二、間接教授＝小兒既に成長して最早直接の教授を受け得べきの時に至るもフェチロン氏は尚寛裕謹飭の旨を離れず及ぶべき丈教授の間接ならんことを企望せり是れ氏の主とする所の教育法にして如何にボーコン侯を教育するに當り此主義を應用せるかは後節に至て之を說くべし氏曰く教授は合式ならざるを以て彌々善良なる者となす、併し其始めて心意に印象する所の觀念は其正しき者を撰ぶに深く注意せざるべからずと

又曰く極小にして且貴重なる器中には之に納るゝに極美の物を以てすべしとフェチロン氏は粧腔の事を好まず曰く修辭學に於ては余は全く一個の規則だも設けず好模範を示すのみにて足れり文典に於ては余は毫も意を注がざるなり教授は間接に暗示せんことを要す宜しく之を直接に課すべからず世人の視て是にても教授なりやと怪むが如き豫想外の教

授法に據らざるべからず右の點に於ては氏は巢窠に先鞭を着け巢窠の著せる「エマイル」中に說述せる教育法の仕組をば既に之を合點し居たりと云ふべし

第百八十三、授業は快樂たるべきを要せ　＝教師としてフェチロン氏の最良なる性質の一は授業は快樂ならざるべからずとするに在り斯の性質は固より善良なりと雖も終に氏の欠典となれり余の氏の此性質を備ふるに就き稱讃する所以は偏に中世紀の粗暴壓制を以て生徒を虐待し暗黑厭ふべき教場を今日に留遺するが如き教育法をば當時に在て能く之を論難破潰したればなり氏曰く今日の教授は生徒に自由もなく快樂もなく但獸々として常に課業に忙しく興味なくして只劾迫改過の責あるのみと當時斯の如き說を持する者は獨り氏のみにして以て不都合不完全の教育法を破りたり氏曰く德育の涵養に於けると

同じく學科は快樂を旨とすべきなり而して余の此性質は終に氏の欠典となれりと云ふ所以は蓋實物教授のみに偏して爲に弊害を生ずる程に至りたればなり

先づ學科を教ふるに就ては務めて小兒の心に快樂を與ふべき方法を撰擇せざるべからず氏曰く吾人は小兒をして倦怠の念を生せず能く其業に耐へしめんと欲すれば其目前に常に快樂を與ふべき物を置かざるべからず自由と快樂との下に勉強の苦痛を匿くせよ漸次に其智見を博め終に廓大に至らしめよ教授と遊戯とを混用せよ余は遊戯の中に知らず識らず書を讀むを覺にたる數多の小兒を目撃したり

智力に活動力を與ふる時と同じく意志に方向を示す時に於ても決して之を强壓すると勿れ無益なる細事を以て之を苦しむるとなかれ其然るべきの時を窺ひ温顔を以て之に教ふべし汝の力の及ぶ限りは推理によりて之を指導すべし極めて必要の時を除くの外は決して小兒をして震栗せしむるが如き嚴格なる顔色を以て之を待すると勿れ

氏曰く若し常に嚴格の顔色を以て之を待する時は小兒の信任を失ふべし若し小兒の信任を失ふ時は教育に依て求むる所の利益を亡失すべきなり小兒をして先づ汝を愛せしめよ汝の前に居るも其過失を責められるべしと思ふの恐なく裕々と安心する所あらしめよと

フェヲロン氏の教義は智力上及道義上に於ても以上に開陳せるが如き寛大の主義に基づかんとを企圖するに外ならず然れども其想像餘り遠に馳せて正道を離れたるの弊あるは掩ふべからざるの事實なりとす氏は順便の方面より萬事を觀察し氏の想像する所の教育法に從ふ時は毫も勉强辛苦する所なく小兒は其學びたる課業を温習するに及ばず何となれば若し之を温習せしむる時は爲めに厭倦を來すの恐ありとすればな

り最も遊戯の中識らず知らずの際に事物を覺知しむるの方法を重じ縦ひ小兒に過失ありとも之に告くるをなかれ何となれば其感情を害するの恐れあればなりと氏の性質は寛大に過ぎ温和に失し一切彈却すべき性質ある者を敎育法より除却せんとを務めて却て一切の勞働を共に除却したり其小兒に與ふべき書物は表紙を粧飾し且美画を描畫すべしと云ふに至ては蓋快樂興味を主とするの一方に偏したる者と謂べし

第百八十四、寓言及歴史 ‖フェチロン氏ハ敎授に趣味快樂あるを主とするが故に從て寓言と歴史とを以て小兒の智力を養成すべき科目中の最先に置けり蓋し物語の類は小兒の想像に快樂を與ふると他の科目の遠く及ぶ所にあらざればなり殊に氏の重ずる所の歴史は聖史にして此中より最も興味あり且快樂なる句節を拔抄して之を授くるを善とせり且其歴史寓言を授くるに當ては敎師は務めて快豁にして平易なる音誦を以て之を說かざるべからず果して能く斯の如くする時は小兒を强制するとなくして能く其注意を控牽するとを得べしと且曰く小兒をして決して此等歴史寓言を聞取り及記憶するの規則に拘泥せしむること勿れ

第百八十五、道徳的及宗教的教育 ‖フェチロン氏は其騒の意見と反對にして小兒は一日も早く道徳上と宗敎上との眞理に着意すべきを要すとせり氏は經驗より演繹せる實例を藉り具躰的に敎授するを善とせり小兒に敎ふるに上帝は白鬚を備へたる老人なりと云ふを以てするも敢て小兒を惑すの恐あるとなし小兒の時の迷想は成人するに隨ひ理性發達して漸く改まる者なれば決して憂ふるに足らざるなり然れども氏は決して宗敎的に偏する者にあらず氏は何事を問はず太過に失するを恐れ祇儀の事と雖も亦然り氏の望む所は程善き信仰に在て妄

信の徒たるに非らず故に氏は妄誕なる奇迹を信せず曰く小兒をして無稽なる物語を信ぜしむるとなかれ又狂氣に類ずる儀式を行はしむるとなかれと氏は此の如く無稽妄誕なる信仰の不可を論ずと雖も自ら宗教の大本を小兒に教へんと欲して上帝を以し目撃し得べき人間なりと云ひ樂園は金銀寶石を以て充盈せりと說くに至ては自家撞着自ら其排撃する迷信の方向に進む者と謂ふべきなり

第百八十六、女子の務むべき研究

ロン氏の書中より童男童女に適用すべき一般の教法を引舉したりしが氏は其書の末に於て殊に女子のみの當さに從事すべき職業義務及其義務を果すに缺くべからざる教育の種類を論じたり

何人と雖も其無智無學なるより女子の身上に墜落し來るべき諸過失を詳悉せしは當時に在ては氏に及ぶ者なかりしなり即ち女子の無學無

識より生する過失を枚擧すれば徒に時を費やし堅實なる義務を盡す能はず輕佻浮躁に陷り無法の想像を書き瑣末の事を奇怪視し專恣放縱に流れ饒舌を逞ふし事に觸れて輒ち情を激する等なり神學に狂せるクイヨン女史の朋友嘗て云へるとあり曰く總て婦人は宗教上の事に就ては餘り力を入れて話すの僻ありと

扨斯る弊害を矯正するにフェチロン氏は如何なる策を提出せしやろは次節に出すが如し然れども其策は尚未だ充分ならずして今日吾人の考ふる所と決して符合するとなし

氏曰く女子をば普通の範圍内に止め置きて之に不德の恐るべきを思ふて節制せざるべからざるか如く智識の恐るべきを思ふて亦節制せざるべからざる所以を敎ふべきなりと

氏の言を推すに智識は女子に取ては無用なり且其軟弱なる天性に對し

ては劫て彈却すべきものなりと云ふに等しきとなからんや

氏は女兒は正しく讀み及書するとを知らざるべからず（氏は專ら貴人及富豪の女子に就て云ふなり）と云ひ且之に加へて文法をも知らしむべしと云へり今此言に據て推考するに氏は女子には差して智識を養ふの必要なしと謂ふが如し此言や甚だ不都合に似たりと雖も當時に在ては能く衆人の常習を破り實際の進歩を促したるものなり而して氏の此言は甚だ不都合に似たりと雖も其趣意は女子たる者は其子女を養育するに必要なる丈の學科は總て之を知らざるべからずと云ふに在りしなり氏は又獨り宗教上の著書のみならず俗人の著述に係る書物を讀むべきを女兒に勸告するに至ては其說頗る稱讃すべしとなす氏は蓋し多く普通の文字を習ひ又希臘人にしてホーメルを熟讀して「テレマチャス」を著述せし位なれば其俗間の著述の趣味あり且利益あるとを知て之を人に勸告するは決して

其謂れなきにあらず氏は古今の歷史を學ぶの利益あるを知りて之を勸告し且能辨術及詩歌をも學習の科目中に加へたり然れとも其音樂を非難して音樂は人をして自ら正道を離れしむる毒物なりと云ふに至ては余は其何の意なるを解するに苦むなり

氏の說く所缺典なきにあらずと雖とも其缺典は決して女子敎育論の稱讃すべきを妨ぐに足らず當時に在ては人皆女子は無學曚盲にして可なりと信し居たるに氏は能くこの妄說を排擊し又浮虛華麗の智識を養成すべしと信し居たるに氏は能く之に反するの敎育法を示し又其趣意の寬大なるあとフィンテノン侯爵夫人と雖とも遠く及ぶと能はずして實に秀作なりと稱讃せしむるが如き書物を著はして女子の爲にせるが如きは皆氏の功にして吾人の宜しく感謝すべき所の者なり

第百八十七、フンペルト孃（千六百四十七年生千七百三十三年死）＝女子の敎育者と

して見る時は氏は學校の開祖と稱して可なりロルリン及ゲンリス嬢を始として諸教師の氏の感化を蒙りし者其幾何なるを知るべからず而して氏の衆弟子の中に於て最高の位地に至る者をランベルト嬢となす其子を戒むるの書(千七百二十八年著)と其女を戒むるの書(千七百二十八年著)とに於て大にフェヂロン氏の所論を採用したり然れども其想像上に關する書物は之を戒愼するとフェヂロン其人よりも深し曰く想像上に關する書物は人心を激昂するの恐れありと其女を教ふるやフェヂロン氏のヲサインヂ教ふるより嚴にして一切の遊戯を禁し又謂らく音樂詩歌の如きは快樂の種類に屬し徒に人の情を動かすに過ぎざるものなりと嬢はモーリェル氏の女子をして懶惰に流れ遊戯快樂に耽らしめたるを深く非難したり且嬢は歴史を愛し殊に佛蘭西の歴史を愛したり今嬢の所論の委曲を此に詳說せずと雖ども嬢を以て女子教育の爲めに非常の功績

を爲したる者なりと許すと敢て難からざるべしと信ずるなり

第百八十八、ボルゴン侯の教育＝氏は其教育理論を確然論定せし後までは決して實際に之が應用を試みざりしは是れ亦奇と謂ふべし而して其ボルゴン侯を得て之を教育するに至て始て其女子教育論に論定せる主義を擧げて之を實際に應用し其如何を驗するの機會を得たり今フェヂロン氏が其心意の全力を注ぎ以て此侯を教育せる方法と其理論の一長一短自ら實際に顯はれて功過相分るゝの跡とを研究するは教育歴史家に取ては之より面白き事はなかるべしと信ずるなり

第百八十九、好結果＝ボルゴン侯は活潑敏捷にして且憤發耐忍の性質を有する人なるが故に間接教育の利を主張するフェヂロン氏其人の弟子たるに恰も能く適當せる人物なりきボルゴン侯の如き勇往憤發の力に富める人を教ふるに教科的の業を強課するが如きは却て不得策な

るが故にフェチロン氏は大に工夫を廻らし深く憔慮して此侯の注意する所を轉換して巧に之を導き以て大に曉る所あらしめたり然るに若し一概に興味索然たる數科的の方法を以て導かんと爲したりしならば侯は恐らくは氏に從はざりしなるべし氏嘗て曰く余は侯の如き能く詩歌と能辨術とを會得するの力を有する小兒を見たるとなしと侯の詩歌と能辯術とに長せし固より其天性の然らしむる所なりと雖ども其能く成就するに至りしはフェチロン氏また與りて力あるなり

第百九十、修身科―寓言＝急性熱情の小兒に修身法を授くるには如何なる方法に依るべきか是れ自ら一種格別の方法に依らざるべからずフェチロン氏のボルゴン侯を敎ふるを見て其然る所以を知るべきなりフェチロン氏は侯の急性熱情の人なることを知るが故に之に經書を說き聞かするの無用なることを知り寓言の體にて之に說話し以て自ら修身法

を曉らしむることを務めたりフェチロン氏の寓言の重ずべき所以は其文章の巧妙なるにあらずして其作意に相伴ふ所の事情に在て存するなり氏の寓言は一時に作爲せる者に非ず侯の過失あるに逢ふ毎に之を諷諭するが爲に作爲せる者にして之を簇めて以て一書となしたるものありホラウセットの牧師の言に曰く此寓言集の章編の順序を見て以て此侯の年齡と敎育上の進歩との如何を窺ふことを得べしと而して此寓言集は獨り侯に適するのみならず一般に小兒の修身書として用ふるの價値ある者と謂て可ならん其「カプリシヤス」（急性の意）と稱する寓言は侯の急性なるを諷して自ら改めしむるが爲めなり蜂と蠅と稱する寓言は侯をして性質の機敏なるも節制の德なき時は益なき所以を知らしむるが爲なり一日フェチロン氏事に因て侯を諫めたるに侯は一旦の怒に乘じ放言して曰く否々吾師よ余は自ら余の何人にして又師の何人たるを知るなりと其翌

日に至り氏は侯の自負心を諷諭せんが爲に「パチァス、エント、セ、ファン」と題する一篇の寓言を讀ましめたり此寓言の仕組はパチャスなる人ありて已の言ふ所不正不義なるも之を譏刺する者ある時は輒ち怒を發するの癖あり一日荒らかなる聲を發しファンに謂て曰く御身は能くヂャプターの子を譏誚し得るや否やとファン即ち從容として答て曰くヂャプターの又氏の作爲せる寓言中其諷意の稍高尚なる者ありて獨り侯の過失を改めしむるが爲のみにあらずして政治上の事を諷するの意に基くものあり其蜂蝶と稱する寓言は工藝國と秩序ある國の美なる所以を知らしむるを旨とし「ナィル」と「ガンヂス」と稱する寓言は人民の愛せざるべからざる所以を知らしむるを主とす以上數種の寓言は孰れも諧謔の裡に正敎を含み侯は之を讀て其寓言中に設けたる人の言行に關する褒貶毀譽を

已が身上に引き比べて果して其心に苦樂榮辱を覺へたるとあるべしと信するなり

第百九十一、歷史科―死人問答＝フェチロン氏の詭計を用ひたるは獨り道德敎育のみに止まらず智力敎育に於ても亦之を用ひたり德育は寓言に依て之を敎へ歷史科には問答法を用ひ而して佛蘭西王位を嗣ぎて政治上の事柄を取扱ふべき準備を敎ふるには「テレマチャス」中の談話を用ひたり

死人問答と稱する書は種々の國の人物及種々の境遇に處したる人物を枚擧したり即ちチャァレス第五世、セシトヂャストの一僧、アリストトル、デカート、レォナルドダウィンシト、ポーシン、シーザー、及アレキサンドル等是なり而して又其問答の材料は歷史文學哲學及技術の如き是なり此等材料は彼の寓言の仕組と同じくボルゴン侯の進歩と其需要の度に應じて

其趣を異にす此方法は後來萬國歷史を問答に依て敎ふるの模範となり頗る生徒の心情を感發すべき方法なりとすフェヂロン氏は亦歷史なる者は自ら興味を備ふるの學科なることを知り別に方法を設けずとも明瞭快豁に講說して小兒の想像力に訴ふれば小兒は自ら其興味を感する者なりとせり

第百九十二、フヂロンは臨機應變の敎育法を用ふ

ボルゴン侯を敎育せしは其常に主張せる無味殺風景なる威權を以て強迫命令するよりも寧ろ温和寬大の法に依らざるべからずとするの主義を實地に應用したるものなり氏の侯を敎ふるや經書を講ずるに非らず談話をなすに非らず只間接の方法に依て之を導くのみ侯の性質は急劇にして怒り易し氏は之を戒むるにセヂカの憤怒論を講するの方法に出でずして左の如き工夫を用ひたり即ち某日の朝一人の木匠師を其室内

に呼び入れ之に内意を含ませ置き侯の來たるを待ち居たるに侯廳て入り來りて立止まり道具類を見つゝありしが木匠師は輒ち其顏色を怒らせ侯に向ひ曰く殿下は宜しく速に去て自ら己の業務を執るべし何となれば余若し怒を發する時は自ら制することあと能はずして逢ふ人毎の腕脚を敗ることあればなりと斯の如きは即ち氏の侯の性急にして怒り易きを諫むるの方法なりとす

若し間接の方法を施して其效なき時は氏は更に他の方法を用ひたり即ち或は侯の自愛心に訴へて其己の名の重ぜざるべからざる所以佛國人の企望に負くべからざる所以を擧げて之に勸告し或は其感情に訴へて其柔和の情と慈善の德とを以て之を感化し侯も時に大に感じ或は氏に向ひ余はボルゴン人の位階を戶外に棄擲すべし然る時は余は師に對しては只一個の渺少なるルイス兒に過ぎざるなりと云へり若し以上の方

法を盡し猶其效を見るあと能はざる時は茲に始めて手荒き手段に出で或は其書物を取上げ或は一切の談話を禁ずるあとありき

第百九十三、教授の趣意を轉換する事＝フェヂロン氏の德育法は寛嚴相濟ひ時々其方法を轉換するを主とす若し某の事を敎授して生徒の心を喜ばしめざる時は更に其敎授の趣旨を他に轉じて務めて小兒の心を喜ばしむるを務む氏は能く此種の方法を適用して倦を敎授し實際に能く其效を奏したるの上より見る時は其方法の頗る善美にして取るべき所あるは勿論なれども又一方より顧みて一般に之を評する時は氏の方法は餘り小兒を喜ばしめ之を慰むるの一方に偏して却て鄙むべく倣ふべからざる廉なきに非らず之を要するにフェヂロン氏は學課を して快樂愉悅の者たらしめんとを務めて却て之をして兒戲に類するの地位に陷らしむる者と謂ふべし

第百九十四、ボルゴン侯の教育の結果＝フェヂロン氏は侯を敎育して其成績を擧げ過ぎたりと評すべし此評や甚だ奇怪なるが如しと雖も實際は決して然らざるなり氏の手練なる敎育法に依て侯は何れの點より見るもフェヂロン氏の肖像となりしに相違なきが如し（シントシモン氏曰く氏の如き敎授法に手練なる人は未だ嘗て見ざる所なり）侯は其成長せるの後に至るも朝を覩るあとを厭ひ一に宗敎的の事にのみ從事する事を喜ぶが如き信敎者となり即ち侯を稱して王と言はんより寧ろ僧侶と稱する方穩當なるべし其自由自主の精神は全く脫去して偏に敬虔頌讃の事にのみ耽り俗塵を厭ふの習慣を帶びたりフェヂロン氏は全く侯の意志を專有し自由に之を操縱弛張しながら敎育の目的は其敎師の靑面無氣力なる肖像を作出するに非らずして自主獨立自ら事を執るに堪へ得べきの人を作出するに在りと云ふの事實を忘れたる者の如し

第百九十五、「テレマチャス」＝「テレマチャス」は一千六百九十八年に脱稿し其目的とする所は全くボルゴン侯を敬ふるに在れども實は其未だ結婚せざる以前に在ては之を讀むの暇なく又之を讀まざりしなり此書は散文の體にして其趣工は「ホーメル」より借り來り而して氏は此書に頼りて以て侯の德性を涵養せんと企圖したるなり此書は訓言に富みたりボイリュ氏曰く余は此書の今少しく宣敎風の臭氣を脫し其道德說前後排置の宜きを得たらん事を企望せざるを得ざるなりと書中秀逸なる勸言を羅列し奢侈の心戰勝を好むの精神を鎭壓抑制する事を勸め無限權を操持するの恐るべき結果を來す所以大望爭鬪の害ある所以を說て之を戒むるあとを主とすルイ第十四世の氏を評して氏は余が國中最も深玄の精神に富める者なりと謂ひしは蓋彼の「テレマチャス」を讀み其中に載するサレンタム共和政治の記事の裡面に陰然表明せる比喩を讀みたるが故ならん此書は侯に道德の履行すべきを勸むるの外に又政治上に關する問題を載せ例へば左に記するが如き普通敎育の組織を論じて小兒は兩親に屬するあと寡くして國家に屬するあと多きが故に小兒の敎育は國家の宜しく擔當すべき所なり故に宜しく公共學校を設立し以て上帝の恐るべき所以國家の愛せざるべからざる所以及法律の尊敬せざるべからざる所以を敎ふべきなり

第百九十六、ボースエト及フェチロン＝ボースエト氏は太子の師傅なり然れども其敎育上の成績はフェチロン氏のボルゴン侯に於けるが如くなるあと能はざるなりきボースエト氏も其ルイ第十四世の太子を敎ふるに於ては頗る能く行屆きて毫も遺す所なし其一千六百七十九年に法王インノセント第十世に寄せて已の敎育法を論ずる書を觀る

に其論ずる所確實にして氏の敎育上に於ける能力の高尙なるを証するに足るべし氏は熱心に勞働せざるべからざるおと又勉强と遊戲とを混用せざるべからざるおとゝを論じて曰く宜しく自ら遊び自ら樂まざるべからずと其太子の競爭心を惹起せんと欲する時は即ち他の小兒を其目前に連れ來て之と爭賽せしめ又羅甸の書を通讀して之を說明し而して其說明法はジェスイッツ派の敎育法の如く斷片零碎なる者にあらずして能く首尾の貫徹せんとを務めたり又戲詩を讀ましめて其精神をして開廓ならしめんとを務めたり希臘羅馬書特に「ホーメル」の讀まざるべからざる佛蘭語に係る文典の研究せざるべからざる歷史の學ばざるべからざる事實を勸告したり而して其敎授法は先づ太子をして自ら事實を擧げしめ而して後氏は之に關する理法を敎へたり今日に遺傳せる萬國史論を稱する書は即氏の著はす所にして細に氏の敎育上に關する精神を見るに足るべき者なり其外地理學の學ばざるべからざる所以を勸告したり此の如き學科を課せられ此の如き敎師の薰陶を受けたる太子は一個の高尙なる學生たるべき筈なるが如しと雖も實際は即ち然らずして只平凡の一個人たるに過ぎざりしなり

ポースエト氏の注意は頗る能く行屆きて秀逸なりと雖も其太子に及ぶ所の應驗は思の外に充分ならざりしなり而して其應驗の充分ならざりしは一に太子の人となりの不良なりしが故のみに非らずして又氏自ら其責に任ぜざるべからざる者あるなりモンライン氏曰くポースエト氏は自ら氣を屈して小兒の氣に投合するおとを知らず小兒を扱ふおと猶成長人を扱ふが如しとヘンリーマルチン氏曰くポースエト氏の性質の嚴格なる小兒に素しては小兒に行ふの術を知らざるなりと氏はフェチロン氏の天然に備へたる屈從柔和の德を缺きたり今二氏を評するにポース

エト氏は嚴格鄭重の敎育家にしてフェヂロン氏は柔和寬温の敎師と謂ふべし

然れども其太子に及ぶべき應驗の充分ならざりしは偏に氏の性質の嚴格にして小兒に素して小兒に行ふの術を知らざるが故のみにあらず又太子其人の性質に缺典あるに因るなり太子の性質は頗る獰惡にして反覆常なく恩を受けて之に酬ゆるあとを知らず當時或朝臣あり太子を評して太子は數多の靈德を備へり然れども深く隱匿して外に顯はす事なしと是れ朝臣の評なる故に此の如しと雖も若し朝臣ならざる人の眼より視たらんには靈德を備へて之を隱匿せる人と始めより靈德なき人とは其間に秋毫の相違を見るあとなかるべし

第百九十七、敎育の範圍及其限界

フェヂロン氏の著せる女子敎育論の某頁中に論述せる一條は暗に太子とボルゴン侯兩人の敎育に於て其相異なる趣ある所を對照したる者に似たり其條に曰く敎育に於て最も困難なるは無感覺の小兒を養成するより甚だしきはなし是れ宜しく知らざるべからざるなり顯敏にして感覺力に富める者は時に或は誤謬の方向に陷ゐるあとなきにあらずと雖も然れども亦大に賴むべき者あり之に敎育を加ふる時は其感觸の顯敏なるが爲に其發達も疾く智識と經驗とを積むと彌久しき時は自ら感情の働を制抑して善良なる果實を結ぶに至るべし斯の如き顯敏なる小兒は吾人は之を敎育して能く事物に注意せしめ其好奇心を感發せしむるの方法を知るなり又之をして悅ばしめ其名譽心に訴へて之を奬勵するの方法を知るなり之に反して天性懶慢なる小兒に在ては余は之を如何ともするあと能はざるなり

右の一條の論定は能くボルゴン侯の人となりを評するに適用すべく左

に率ぐる所の一條は暗に太子の人物を批評したるが如し曰く其思想錯亂して正當の位地に在らず事物を聞くと雖も毫も之に感觸せず何事をも爲すあとを厭ふ如き小兒に對しては如何なる善良の敎育も其效を見ると能はず然れども是れ全く其效なしと謂ふに非らず只其效の僅少なるのみ然るに輕燥に思考を下す者は謂らく天然力は自ら有爲の人物を助けて其功を爲さしめ敎育の效は與て力あるとなしと是れ大に誤れりと謂はざるべからず

敎育家中或はボースエト氏の太子に施せる敎育の無功なるを覩て最良なる米穀も不良なる地上には成長するあと能はざる者なりと信ずる者もあらんかなれども又一方に於てボルゴン侯のフェチロン氏の感化を受けて悉く其不良不德の行爲を改め善良なる諸德を開發せる事實あるを覩る時は適當にして堪能なる敎師の下に在ては自ら感化すべからざる

小兒なるあとを知るに難からざるなり

第百九十八、約解

(一)敎育の人心を感化淘汰すべき術たるとを示すの最も著明なる者はフェチロン氏の敎授術歷史に若くはなし而して又如何なる感化も之を抗拒して受けざるの好的例はボースエト氏の弟子なる太子の場合に若くはなきなり

(二)以上二者の的例は又敎育に人爲と自然との二要素あるとを示すなり即ちフェチロン氏の敎授術を見る時は人の性質を管理制御するの頗る有力なるを見るべしボルゴン侯は氏の敎育を受けて殆ど其天然の性質を變じ更に新奇の性質を再造せるが如し

(三)又敎育をして其小兒の心意を羈束强制するの具ならしめずして其小兒の意向と並行せしめんとなしたる計畫の既に行はれたるを見るに足るべし然れども生徒の意志に逆ふて無味雜風景の敎育法を廢めて一に

其自然の意向に同和するの一偏に泥み却て吾人日常の事柄は多く吾人の意向と相反する者多き所以を忘るゝに至るとあるなり

(四)知らず識らずの際に生徒を誘導するの教育法は教育術の最も高尚なる者なり

(五)フェヲロン氏の寓言を假りて德育を施すの方法は輓近の教師に在ても能く適用し得べきの方法なりとす

第九章　第十七世紀の哲學者　デカート、メールブランチ、ロック

デカート、メールブランヂ、ロック、〇デカート(千五百九十六年生千六百五十年死)〇方法論〇普通流行の教育に關する批評〇輓近教育法の大主義〇客觀的及主觀的の教育法〇メールブランチ(千六百三十八年生千七百十五年死)〇感覺的教授〇周圍事物の勢力〇ロック(千六百三十二年生千七百〇四年死)〇教育考案〇躰育〇進歩を一て困難なからしむ〇衛生奇談〇教育の重んずべき事〇名譽の感覺〇德育の主義〇躰罰の忌むべき事〇智育〇利學の研究〇課目の人心を誘發すべき研究法〇職業は當さに學習すべきや〇職工學校〇ロック及婆羅〇約解

第百九十九、デカート、メールブランチ、及ロック

論者メルブランチ氏ハ唯心論者にしてロック氏は感覺論者なり此三氏は即ち第十七世紀の哲學者にして教育上の歴史に關係を有する者な

り此三氏の中最初の二氏は只教育上に關する大脉の主義を說明せるのみなるが故に教育上の歷史に對しては間接の關係を有するに過ぎざれどもロック氏の如きは英國教育法の經書とも稱すべき一書を著し特に教育上に關する疑問を論じ教育上の歷史とは親密の關係ある人なり

第二百、デカァト（千五百九十六年生千六百五十年死）＝輓近哲學の始祖なるデカァト氏は教育歷史家の爲めに一個の教育者として其目次中に編入せられずと雖も然れども吾人の視る所を以てするに當時教育の運命上に捗々しき影響を及ぼせるは恐らくは氏の右に出づる者なかるべし其著せる方法論と稱する書中には教育上に關係する仕組を論じたるとなく又直接に教育事務を說きたるあとなしと雖も其哲學上の原則主義を論述說明して大に人間思想の方向を變じ既知の眞理の研究すべきと未知の眞理の搜索せざべからざると及び明瞭精密に事實を說明するの方法を賠ま

しめたるが如きは其教育上に及ぼす所の影響頗る大なる者なり

ロルリン氏曰く今日講師狀師の論鋒若くは學問上に關する論文等を見るに皆順序正しく精密適當にして且確實なるを見る此の如き論辯の風は以前に在ては今日の如く盛ならざりしなり其然る所以の者は此十七世紀の間哲學の非常に進歩したるに因ると謂はざるを得ず是れ許多學者の一般に信ずる所にして其信ずるや決して其謂れなきに非らざるなり

第二百〇一、方法論（千六百三十七年著）＝其哲學派の如何を問はず必らず其中には教育論の萌芽を含有せざると能はず大凡ろ哲學者が各其派に從て人間の天性と運命とを解釋するに當りては必らず教育の目的と方法とに關する各種の歸結を爲すを常とす故に余は哲學者は一般に教育者なりと見做して然るべしと思ふ者なり

デカアト氏の如きは即ち其一人にして其著せる方法論の首章と科學論とに於ては別に一章を設けて實地教育法の事を論述したり又其論理法の概則を應用して別に教育上に於て一個の一機軸を出せり

第二百〇二、普通流行せる教育法の批評 ‖デカアト氏は其

ラフレッチの專門學校に於てジェスイッ派より受けたる教育の事に就き長き説明をなし自ら普通流行の教育法を批評し且己の意見を吐露し其教育上撰擇すべき方法を論述したり

氏曰く余の幼稚の時より受けたる教育はただ文字の教育のみなりしが其後學士の位階を得るに必要なる學課を卒業したるや疑惑迷想頗る余の心頭に紛起し來り余をして從來學習上の勞働はただ自ら余の益々無學無識なることを曉らしむるの外他に益する所なきかと思はしむる計なりしと

今氏の謂ふ所の意味を推衍するに氏は八年間歐羅巴中の最有名なる學校に在て熱心研究すと雖ども未だ以て人生に必要欠くべからざる明瞭確實なる智識を得ることなかりしなりと云ふの意味にして是れ暗にジェスイッ派教育の無益泥式の弊害に陷ゐりたるを非難したるに外ならず

ジェスイッ派に於て施し來れる各種の學課を通覽したるの後氏は先づ其古書の研究に泥みたるの弊害を論じて曰く異世代の人と談話することを務むるは猶外國に旅行すると一般にして若し外國旅行に長日月を費す時は却て其本國を視ること異邦の如き思あらしむる者なりと氏は未だ數理學の實用を授からずして單に其機械的應用術のみを教へられたるを遺憾とすり又修辭學及詩歌を非難して曰く能辯術及詩歌の如きは勉強の果實に非らずして寧ろ天稟の才氣に屬する者なりと古語の如きは只其著書の意味を解する位にて充分なりと（此點に於ては氏自ら其謬

言なることを知らざるなり)氏はまた羅甸語若くは希臘語の研究は智力を啓發するの裨益を爲す者なりとの事實を許さざる者なり

以上の所論に據て之を視る時はデカアト氏はジェスイッツ派中に流行せるが如き不都合なる敎育法を變じて更に確實堅固にして直接に人生に必需なる敎育法を案出したるなれども實際に於ては則ち然らず依然として能辯術は非常の勢力と美妙力とを有する者なりとなし詩歌は人心を迷はしむるの柔和寬調の趣ある者なりとし古經文の誦讀は能く古の名人賢士と談話せしむる者なりとなし歷史は能く人の判斷力を形成し寓言は能く人の心を樂ましむる者なりとなして孰れも之を尊常の學課目中に編入して敢て之を排斥するとなかりき然れども氏の此等の學課を採用するや敢てジェスイッツ派の弊風を襲踏せずして自ら人生の實利實要に裨益あらしむることを務めたり

第二百〇三、晩近教育術の大主義 ‖デカアト氏は科學的の眞理を探究するに當りて人心の方向多く謬謬の點に向ふの弊害を矯正せんと欲するの思想より出でゝ知らず晩近の敎育上に關する二三の大主義を論定したり

先づ第一に凡ろ人間は物を知覺し及之を領會するの心あると萬人同等にして毫も不同あるとなしとの理論を確定して曰く善心は世界の萬物中に在て最も公平に分配排置されたる者なり云々又曰く物事を判斷し眞僞を識別するの能力は自ら萬人同一なりと今此言の意を推すに如何なる人と雖ども同等に敎育を受け得べきの心力を有するなりと云ふに外ならず今日文明諸國に於て孰れも數多の小學校を建てゝ兒童を敎育するは是れデカアト氏の人間の善心理性は孰れも同等なりとの思想を實際に擧行適用したる者なりと稱して可ならん

氏又曰く人は完全なる心を有するのみにては未だ以て充分なりとするとを得ず但其完全なる心を巧に用ふるを以て最も貴ぶべしと爲すなりと今此語意を衍繹せんに人の天性は其天性自身にては未だ以て充分なると能はず即ち之を指揮善導せんとを要するなり而して之を指揮善導するに當り最も注意すべき者は其方法なり心意の能く其本分を盡すは即ち其天然の能力なる想像力、記憶力若くは思想力の敏捷なるに因ると少くして能く此等の諸能力をして智力的方向の規矩に從はしむるに因ると最も多しと爲す即ち敎育は敏捷にして確實なる智力を形成し及之を開發するに於ては其天然力より強きと數倍なりとす

其他氏の確定せる主義と云ふは卽ち從來は專ち主權者の强命したる說を妄信したるが之を排斥して代ふるに自由思想と反省力とを以てしたる如き卽ち是なり氏曰く此自由思想を養ふの第一着は先づ其知らざる所の眞理を妄受するとなく能く之を其証據に斜して斯々なる者なりと確に認めたるの上にて始めて之を信ずるに在り又其己の心意上に明瞭確實に表現して一點の疑なき者の外は決して其判斷力の中に加ふるとなからんとを要すと氏は斯る主義を顯表して以て獨り科學と哲學との目的を維新せるのみならず大に從來の陋風なる器械的の妄信と單純なる記憶力の演習とを排除し因て以て大に智力を養成し明瞭なる觀念を醒提し判定力反省力を激發すべき合理的方法の必要なるとを世間に知らしめたり勿論氏と雖ども決して學校兒童をして其確定せる說を悉く放棄排除して更に己の意見を立てしめ以て悉く小デカアトたらしめんと欲するに非らずと雖ども其妄信を廢めて一に証據に依て已の信ずる所を立つべしと云ふに至ては何人と雖ども誹議すると能はざる敎育上の敎義なりとす

第二百〇四、客觀的及主觀的教育法　＝余は是より輓近教師社會の實施せる教育法に二樣ありて而して兩ながら正當なる者にして其傾向の各相異なる所以を論述すべし即ち一派の教師は何事を措ても先づ小兒の靈知を開發することを務め又一派の教師は外より物の智識を注射することを務むる者即ち是にして前者に在ては教育なる者は内部心性を開發すべき者なりと見做し後者に在ては外部より注入すべき者なりと見做すの相違あり語を換へて之を言へば前者は之を主觀的の教育法と稱すべく後者は之を客觀的の教育法と稱すべきなり倍根氏は英國の論理學大家にして最も倍根氏の如きは卽ち後者の主義を執る者なり倍根氏は英國の論理學大家にして最も觀察と經驗を重ぜり氏曰く今事物の理を推理するに當り其推理の根據たるべき事實を知らずして徒に推理するは恰も風の重量を料ると一般なりデカート氏の如きは固より事實の研究を怠慢に附せる者に非らずと雖ども其觀察と經驗とを重ずると倍根氏の如くならずして專ら心意其物を練習することを重じ觀察と經驗とは只心意練習の機械として之を用ふるに過ぎず今日の教育は毫も小兒の靈知其者を開發練習することを務めず只其眼前に無數の實物を經過せしむるのみにて之を實物教授と稱し以て能く教育の目的を達し得べしと思考す此の如き教師はデカート氏の最も惡む所なるべきなり

第二百〇五、コ・ルプランチ（千六百三十八年生千七百十五年死）　＝氏は深く神秘を信し且熱心なる理想論者にして天地萬物一切の事を擧げて皆上帝の所爲に係る者なりと信ずる者なるが故に斯る人物に向て教育上の事を責むるは無理の談なり加ふるに教育上の事に就ては氏の之に注意せし事甚だ稀にして實際意を教育上の事に用ひたるとなしと謂て可なり氏は教授教會の一員にして能辯學者なり然れども自ら教授の事に當りたると

なく其畢生の力を盡せし所は即ち形而上の眞理を探討するに在りしなり然れども今暫時の間此の一意に上帝を信奉せし學者の俗世界の事を如何に夢想せしか又其實地敎育上の事に關して如何なる思想を懷き居たるかを叙述するは頗る興趣ある事なるべしと信ずるなり

第二百〇六、マルブランチ氏は感覺に訴ふるの敎育を非難せり ‖若し氏に向て敎育の事を問ひたらんには氏は必らず答て曰ん敎育に於て第一先とすべきは抽象的の眞理を以て小兒を養生するにありと是れ氏の主張する形而上學は純粹なる觀念的に偏するを以て其答の必らず此に出づるを知るべきなり氏の意見にては人の靈魂には年齡あるとなし故に小兒と雖も理想的の事を思辨するに難からざるなり故に感覺に訴ふるの敎育は宜しく之を擯斥すべし何となれば若し小兒にして專ら感覺のみを使用する時は自ら形而上の思想を放却するの恐あればなりと小兒は無形的の眞理を思辨すると能はざる者なりとは是れ何人と雖ども否拒すると能はざるの眞理なり若し氏をして答へしめば必らず曰ん小兒の天性に於て決して無形的の眞理を思辨すると能はざるにあらず但し從來より不良の習慣に感染して然るなり之を矯正するには自ら其方法ありと

而して氏は又其方法を述べて曰く若し小兒をして物に恐怖せしむると雖ども氏は願望せしむるとなく苦痛を受けしむるとなく又其快樂とする所の者を悉く移去せしむる時は其始めて談話するを得るの時より既に能く最困難なる抽象的の眞理若しくは數理學機械學を敎ふるあとを得べきなり

此に依て之を觀れば氏の意は小兒の心中に備ふる快樂苦痛の念を壓伏し及敎育に依て啓發すべき意向を抑制せんと欲する者なりと見做さざ

るを得ず

氏又曰く茲に大望を懐ける人ありて若し適ま失敗して俄然と其財産と信用を失ひたるの際に在ては決して形而上學の疑問若くは代數學の方程式を解くべきの境遇にあらざると同じく方に林檎桃柿を慕ふて之を見て其腦裡に印象を與ふるの深き猶四十歳以上の人の官位爵號を慕ふが如くなるの時に於ては決して抽象的の眞理と聞くを悦ぶ者に非らず故に宜しく小兒の快樂とする所の者を奪却して始めて之に形而上の事を敎ふべきなりと

氏の論を實行せんとする時は先づ小兒の感覺を奪却し其感覺に訴ふべき者は一切之を除去せざるべからず然るに氏は小兒を敎育するに體罰の必要を說きたり是甚だ奇なり然らば一切感覺に訴ふべきは之を除却して獨り觀笘のみを存すべしと云ふの意か

第二百〇七、外物の勢力

＝右の外に尙一の擅着せる說を爲せり卽ち氏は自ら理想論者なるに拘らず外界事物の人の靈魂の啓發上に及ぼす影響の頗る大なることを信せり氏は現時の唯物論者の如く人は其食ふ所の物に化成すと云ふの甚だしきに至らずと雖ども猶物質榮養の人心に及ぼす影響の深きを信ずると稍や唯物論者に似たる所あり氏は葡萄酒及其他精酒の喜ぶべきを說き其自ら事を執るや必ず先づ珈琲を喫すら然らば氏は其理想論者なるに拘らず靈魂の全く獨立して外物と毫も關係なしと云ふ說を許さゞるが如し其言に曰く吾人は外物の束縛を受け周圍の事物と相關係して立つ者なりと

第二百〇八、ロック（千六百三十二年生千七百〇四年死）

＝ロック氏は最も心理學に長じ觀念の起原と心意の要素とを分解するの術に長じ佛蘭西のコンデュラック日耳曼のハーバート英國のヒューム蘇格蘭人及輓近哲學者の大半は皆

氏の心理學說を奉する者なり氏の執る所は實驗心理學なり而して心理學より敎育學に移ると甚容易なれども氏は其哲學者たるに至りし後は更に敎育學者たるに非常の盡力を爲さゞりしなり

第二百〇九、敎育考案（千六百九十三年著）＝氏の晩年に至り敎育考案と稱して出版せし書は其多年の經驗を統括したる者なり氏はウェストミンスター學校の學生にしてデカート氏と同じく幼年の時より泥式的に古書を敎授するの非なることを承認せり氏はヲックスホルドの大學校に在りて古語の研究に耽るの非なるに拘らず終に一個の達者なる古語學者となれり千六百五十六年に「バチェロル オフ アーツ」の學位を得て其最も好む所は博物學理學及醫學等に在るに拘らず終に一個の達者なる千六百五十八年「マスター オフ アーツ」の學位を得て直に學生より大學敎授の位地に登れり氏は希臘語の敎師にして屢希臘語にて巧に演說せり

然れども最も自由主義の敎育を好み其敎授の學課目中より「ヘルレニスム」を擯斥せり等て修字學及道德哲學の講師となり千六百六十六年政治上の事に携はり學問上の事務を見捨てしとは雖も其志猶敎育上の事を忘れず常に一私人の敎育に己の考案を適用せんと欲し朋友知己の家族を筴めて之を敎育せり其經驗觀察せし所を集めて一書を編輯せり卽ち謂ふ所の敎育考案と稱する者是なり故に此書は氏の自ら朋友の子女を敎育して得たる所の經驗の結果なりと稱すべし千六百八十四年と千六百八十五年の間に於て氏が其朋友なるクラークに寄せたる書は其事實を述ぶるや簡單にして實際人の慣熟する者を撰び其創見力と正格なる論證は以て氏の思想の秀逸なるを見るべく之を古經文の中に加ふるも不可なるとなかるべし千六百九十五年ヒューコスト氏は之を佛文に飜譯して氏の存命中數回の出版を爲せり氏の著せる敎育考案は漸く世間一

般に其勢力を博し莫騒ヘルヴェチアス二氏の教育論の如きは教育考案の意を受けたる所寡からず該書は其後レィブナィッ氏の爲に非常に稱讃せられ其自ら著せる人間悟性論の上に置くべき者なりとせり近頃エッチマリソンなる人ありロック氏の書を研究して頗る其説を喜び曰く若し此教育考案なる書をして今日之を別巻となし出版したらんには必らず非常の成績を顯はすべしと

第二百十、教育考案の分析

教育考案と稱する書は緊要なる教育上の疑問は一として其如何を論究せざるあとなく又一として其疑の存する點を擧ざるあとなき書にして實に教育家たる者の讀まざるべからざるの良書なり然れども余は今茲に細目を列擧するあとを爲さず只此書より抜抄し得べき緊要なる主義を擧げて讀者に知らしむべし其緊要なる主義とは第一躰育に於ては身體を健康にするあとを重じ第二

智育に於ては實際の利益なるを主とし第三德育に於ては名譽の主義を規矩として自ら其身を修めしむるを旨とす

第二百十一、躰育ー身体を健康にするの術

ロック氏の教育は其歸着する所健康の心意は健康の身體に宿ると云ふに在り故に氏は醫師ラベライス氏の如く躰育上の疑問に最も心を用ひたり然れども其奇怪の事を好むの心と躰軀を健康にするの一事に偏するとに依て大に其正當の判斷を誤まりたり左に擧ぐる所は體育上に關して氏の主義とする所を概括したる者なり

氏曰く要するに多くの空氣を吸ひ多く運動して多く眠り素質なる食物を食ひ葡萄酒若くは精酒は一切之を禁し藥をば毫も飲むあとなく衣服は余り身體に緊着せざる樣になし又餘り暖き者を用ひず就中頭と足とを常に冷かならしめ時々冷水にて足を洗ひ及之を濕潤の所に置くべし

能く此の如くする時は必らず其身體を健康ならしむるを得べしと以上は只氏の體育に於て主義とする所の大體を擧げたるのみなれば其詳を知らんと欲すれば尚其細目に入りて氏の思想の如何を吟味するを緊要なり

ロック氏は敎育家中に在て小兒の爲に其食物衣服及睡眠に關し一定にして合法の論說を爲せし者の嚆矢なりとす其騷の小兒の身體を形成するは宜しく一に自然力の作用に任すべしと稱せる一言は其騷氏の言に非らずしてロック氏の定論なり故に氏は其衣服の身體に固く緊着せる者を禁じ曠原に遊戲し日光に曝さるべきを善とせり氏は小兒は宜しく農夫の寒熱に暴露し頭手を露顯するが如くなるべしと云へりロック氏は小兒の三四才に至る迄は砂糖葡萄葡酒香物肉類を禁し菓實は草莓林檎及梨を食ふことを許して桃梅及葡萄を禁したり林檎の如きは小兒の最も好む所なり氏曰く昔人類の始祖の其樂園を放逐されしは全く林檎の爲なり斯の如く林檎は昔より人の好む所にして今日小兒の之を好むは全く祖先より遺傳せるなりと抑ロック氏の小兒に葡萄を食ふことを禁したるは氏は英國に生れて其土に葡萄を產するあと甚だ因難なるが故に猥に之を喰ふことを禁したるなり以太利の某氏嘗て云へるあとあり曰く英國に於て熟したる菓實と云へば唯林檎のみなりとロック氏は食事に一定の時を定むるに及ばずと云へり最太なる謬見なりフェヂロン氏は之に反して食事に一定の時を定むるを以て必要の事なりとせりロック氏の謬見は獨り此に止まらず小兒に關する衛生の事を論して曰く小兒の靴は極めて其皮の薄きを要す何となれば若し小兒にして水邊に行く時は其靴皮の薄きが爲に自由に水中に行くあとを得べければなりとロック氏の小兒を扱ふふ未だ嘗て聞かざる所の嚴格を以てし其身體薄弱

にして鄭重なる養生に依りて纔に其健康を保存するの小兒に在ては頗る危險なりとすセイヴン嬢の氏に寄せたる書翰は其所論頗る正確なりと す曰く若し御身の小兒にして其身體健康なれば之に嚴酷なる敎育を加ふるも可なるべけれども若し其身體虛弱なる時は斯る敎育法は汝の之をして健康ならしめんと欲する企望に反して却て之を殺すに至るべしとロック氏曰く人の身體は其遭ふ所の境遇に適合すと余はピーダー大王の奇話を適載して之に答ふべしピーダー大王は水夫は平生より潮水を飮むの習慣を養ふを善とすと云へる言を聞き直に令を出して爾來海軍人の兒童は潮水の外は決して飮むべからずといへり然るに兒童の數日ならずして續々死亡するを見て更に此號令を廢したりと云ふロック氏の敎育上に關する怪說は其騷氏を除くの外は何人と雖も之を稱讚するとなし今之を一々擧げんとすれば則ち擧ぐべき者なきに非らず

と雖も然れども之を擧ぐるを止めて此に只氏の敎育に關する大體の敎義を擧ぐべきなり而して其大體の敎義に至ては大に稱讚すべき者あり何となれば當時の放縱華美徒に流行を追ふの風に反して嚴格なる規律と質素なる食物の重んずべきを說き大に質朴にして男らしき風習を養成したるの功あればなり

第一百十二　德育　ロック氏は德育を以て其所謂敎育の最先に置けり曰く富貴の人は其財產を子孫に傳ふるの外に亦左の四者を傳へざるべからず即ち第一善德第二謹愼第三善良なる動作第四敎育是なり善德及謹愼を以て第一に務めざるべからざる者なりとなし曰く敎授なる者は敎育中の最小部分を占むる者なりと其著せる敎育考案の中に於て頗る善德の稱讚すべきことを反覆せり

ロック氏も亦現時の哲學者ハーバートスペンセル氏の如く敎育上一種の

癖見を懷き智力を開發するの以て大に德性を涵養すべき所以の理由を信ぜず然れども其癖見を懷き居たるに拘はらず其能く平凡なる敎師の只記臆法を養成し靈知を啓發せば是れにて敎育上の能事終はれりと思考せる者に對して其不可を論証し大に之をして提撕する所あらしめたるは偏に氏の效にして吾人は此點に於ては深く氏に謝せざるを得ざるなり

敎育上最も務むべきは善良なる德性を涵養し高尙なる情操を啓發し及美德の性質を形成するに在るは決して認ゆべからざるの事實なり

第二百十三、名譽を以て德育の主義とおを＝氏の德育を以て敎育の首位に置きたる所以は余已に之を論じたり而して是より其德育の主義と方法とは果して如何なる者なるべきやを論ぜざるべからず德育の主義をば冀騷氏の如く實利主義に執るべきや果して然るときは小兒は一事を爲すの前に當て此事は如何なる利益あるべきや彼事は如何なる利益あるべきやと一々問はざるべからず是れ果して善良なる主義と爲す事を得べきや余の既に論じたるが如くロック氏は智育の事に於ては實利主義を主張せしと雖も德育の事に於ては即ち然らざるなりロック氏の德育主義は果して如何なる者なりや敎師若くは兩親の威權を主として之に服從せしむる所謂恐怖を主義とせる者なるや曰く然らずロック氏は壓制を好まず覆笞を用ひざるなり然らば之に反して情欵即ち兩親の愛情を主義とせるが曰く是れ亦然らざるなりロック氏は己自ら感受性に乏しく從て小兒の感受性に訴ふべき者を以て德育の主義となすを思はざりしなり

ロック氏の小兒を待するや恰も成人を待するが如く毫も其天性の脆弱なるあとを思はず故に始より名譽の情操に訴へ名譽の褒すべく恥辱の貶

すべき所以を說きて以て其德性を養はんことを務めたり即ち小兒の心力の未だ及ばざる高尙なる情操を以て其德育の主義となせり名譽と云ふ語は即ち義務なる語の變名にして又善德と異名同義の言辭なるが故に斯る高尙の思想は旣に成人にして世事に練習せる者の獨り能く存すべき所にして未だ經驗もなき幼稚者をして他人の毀譽を聞きて榮辱の感を懷かしめんと欲するは無理の談と謂はざるを得ず若し幼稚者にして果して能く毀譽榮辱の感を懷かしむることを得べき者ならんには氏の企望するが如く名譽の情操に訴へて之を率ゆることを得べきも是れ甚だ疑ふべきの事にして事實有り得べからざる事なりと信ず然るに韓圖氏の言は誠に理あり即ち左の如し

曰く小兒に對して義務の談をなすは無益の勞なり小兒の義務を解するや只之を犯す時は責板にて打たるゝ者なりと思ふに過ぎず故に亦小兒に對して恥辱の感應を責むるは無理なり宜しく其稍成長して少年の時に達するを竢つべきなり事實恥辱の觀念は名譽なる觀念の旣に發生せし後にあらざれば開發すべき者に非らずと

ロック氏は又小兒は名譽の感覺を以て自ら其行爲を規制するに足るべき德性の力を備へ又其始めて談話を爲すとを知るの時より旣に事物の道理を推續するに足るべき智性を備へる者なりと思惟せり是れ亦大なる謬見なり小兒をして善良なる習慣と善德の行を形成せしめんと欲せば則ち小兒の天然及び人爲に備ふる心性の本原に據るを以て最も得策なりとす即ち小兒の自愛心と靈智性是なり而して其名譽の情操若くは義務の情操と稱するが如き高尙の情操は但漸々年の長ずると共に發達し來る者にして遂に能く此等情操の規矩を以て其身を規制するに至るべし然れども是れ只年の長ずるに從て始めて發達すべき者にして幼年の時に

は未だ斯る情操の發達することなき者なり且ロック氏の德育上の欠典は小兒の時より既に盛に發達せる愛情に訴へざるに在りとす氏の小兒を待するや恰も理性の完備せる成人を扱ふが如く又之をして自治の精神を發揮せんが爲に悉く罰則を廢止せり固より小兒と雖も自由と威嚴の德を備ふる者なれば其二德を敬すること當然の義なりと雖も之を敬するに過ぐるは無用なり而して小兒をして健康自治の精神を發揮せしめんと欲して一切の恐怖すべき罰則一切の制抑すべき規律等を撤去するが如きは誠に無用の事なりとす

第二百十四　躰罰の非難すべき事＝ロック氏の德育に關する理論の基礎を十分に擴張せざりしは打ち消すべからざるの事實なり然れども氏の德育事業に關する積極的の部分に於ては未だ完全せざる所ありとするも又其德育上爲さざるべからざる個條をば悉く擧指せざる

所ありとするも其消極的の部分即ち其當さに爲すべからざる一切の條項を禁ずるの部分に於ては氏は能く其功を奏したりと謂はざるべからず一般の罰則を論じたる章と特に躰罰を論じたる章とは氏の著せる德育の考案の各章中に在て最も觀るべき者なりロルリン及騷甚二氏の如きは其罰則の事を論ずるや要するに氏の意を祖述したるに過ぎずロック氏と雖も其罰則に關する意見は全く氏の創始せる所に非らず是れ亦モンテイン氏の意見を借り來りたるなりモンテイン氏は其著せる論文中に於て寛嚴宜に副ふは是れ敎育法の規矩なりと云へり而してロック氏も亦此を以て其敎育法の規矩となせりモンテイン氏は鞭笞は最後の裁判なり總べて鞭笞は奴隷的の罰則にして從て奴隷的の氣質を養成する者なりと云へり而してロック氏の意見も亦之と符合せり氏は全く鞭笞をば廢止するを善とするの論者なれども若し小兒の頑固强暴にして如何ともす

るあと能はざる時に於ては最後の手段として之を用ふるも可なりと許すに於ては亦當時の習慣に依循したる者なりと謂はざるを得ず當時の習慣は甚だしく鞭笞を重じ殊に英國教師の如きは鞭笞を以て生徒の品行を糾すの野蠻なる習慣に懸々するあと甚だしく殆と吾人の想像するあと能はざる程なり且つ最も驚くべきは學生輩の其鞭笞を重ずるは猶教師の之を重ずるが如くなるに在り千八百十八年にチャートルハウス學校舊弟子の一人嘗て云へるあとあり曰く吾輩の教頭なるラッセル學士は自ら一種の定見を立て躰罰をを廢して易ふるに罰金を以てすべしと云ひたるに當時の人々皆此言を抗拒して曰く鞭笞は之を用ふるも貴人の威儀を損するあとなきも罰金に至ては大に貴人の威儀を害すと又チャートルハウス學校の學生は皆大聲疾呼して罰金は之を廢せざるべからず鞭笞は永存せざるべからずと云へり鞭笞永存論者遂に勝利を得て再ひ鞭笞を用ふるに至れり是に於て一同は大に安心し其翌朝教場に入りたるに數多樺木の堆積し居るを見たり而して更に之を使用するの方法を議するが爲に大凡二時間計の會議を開きたりと

第二百十五、智育＝智育に於てはロック氏は明に實利主義を主とす而して此實利主義は氏の時に在ては微々たりしが今日に至ては益盛に行はるゝに至れり氏既に實利主義を主とす故に其智育は文學の人を養ふにあらず理學の人を養ふにあらず即ち世間の活劇場に立て其巳の利益を計算し其財産を處置し其職業を執行し又一個人及良民として其義務を盡し得べき智識を與へて活社會の事に慣習する人物を養ふに在り

第二百十六、實利的の研究＝ロック氏の教育上に爲せる功績の最も著名掩ふべからざる者は從來より因襲し來れる虚文の練修即ち浮

華の修字學及閑雅なる辭藻の研究に代ふるに實利的の智識を得るの研究を以てしたるに在り氏は生計の助に直接の關係なき學科は皆之を擯斥せり然れとも其實利實益を重するの餘り當時流行の虛禮虛文を排撃抗拒するあと甚しきに過ぎ古經文の如き縱ひ實用の益なく又人間の生存上に常に需要を有する者にあらずと雖も智力の練習と判斷力の養成とに於ては有力なる機械として使用し得べき利益あるあとを忘却したるが如し故に羅甸語希臘語のみを研究し死せる文字のみを練習するあとを務むる者の如きは之を狂士腐儒なりと見做せり然れとも氏は決して實利學を盲信し實驗學に耽り以て人生に直接の關係なき學科を舉げて悉く之を廢止せんと欲するが如き者に非らず氏の企望する所は虛禮虛文の專ら學科の專權を握るを制して更に人生に必要なる學科を以てせんとするに在るなり

第二百十七、學課目＝小兒の讀み書きを略ほ覺たるの後に於ては宜しく直ちに圖畫を敎ゆべきなりと然れとも氏は繪畫及一般の美術を好まず繪畫及美術の如きは小兒の心意上に及ぼす所の感化力は頗る鉅大なる者なれ共氏は斯る事實あるあとを承認せずして偏に之を卑みて顧みず惟圖畫は實際の利益ある者なれば務めて之を習はしむべしと稱して之に讀書習字と同一の價値を附したり

小兒若し圖畫を能くするを得たれば次には本國語を習はしむべし而して本國語を習はしむるは讀書を以て始めとして尋て作文簡單なる物語若くは親近なる書翰文を以てすべし尋て直に活語を敎ふべし（ロック）氏は其國人に佛蘭西語の研究を勸告せり若し能く活語を覺へ得たれば此に始めて羅甸語を研究せしむべきなり（ロック）氏の學課の仕組は其科學を廢するの一事を除くの外は嘗て佛蘭西中學校にて十年間行ひ來りし學課

の編制と略ぼ同しき者なり

ロック氏は羅甸語の敎授法は徒に其文字のみに注意せしむべからず宜しく實際の利益を主とすべきなり成るべく羅甸語を巧に談話するの敎師に就て直接に學ぶを善とす若し敎師なき時は直接に其著書を誦讀すべし文典の練習背誦の練習及羅甸語の作文の如きは敢て之を課するに及ばず成るべく早く容易なる羅甸語の讀本を讀ましむべしといへり氏の注意する所は羅甸語を學んで巧に羅甸文を作るに在らずして之を學ぶは羅甸語にて著せる書物の意味を了解せしむるに在るなり然るに當時の敎師にして羅甸語を以て困難なる文章を綴るを喜ぶ者は孰れも氏の論証を見て憤激し容易に之に首肯せざりしなり希臘語の如きはロック氏は全く之を禁じたり併し之を禁じたるは只其辭藻の末に耽るとを禁じたる者にして學習者文人學生の輩に對しては一應希臘語を知るの敢て

不可なるとなきを許せり但し小學校に於て之を敎ふるとを許さず何となれば小學校は活世界上の事を敎ふべき所なればなり斯の如くする時は天文學と雖も自ら實際有要の學課を招致するの媒介となるべしロック氏は地理學を以て學課の首位に置けり何となれば地理學は目と記憶力を練習する者なればなりと次を算術となす算術は人間の活事務を執るに當て一日も欠くべからざる者にして之なければ一事をも執るとと能はざるなり次に天文學の初歩となすざる幾何となす次に年代記歷史なり此二科學は最も興味あり且有益なる者とす次に倫理學及民法なり此二學科は今日と雖も佛蘭西學校の科目中に入らず次に物理學即ち有形學なり而して最後に商法學及簿記學となす

第二百十八、小兒の心を誘發せざるべき敎授法 ― ロック氏の智

育は其目的は實利主義に在り而して之を教ふるの方法は最も興趣ある
を旨とすロック氏の徒に博學に誇りて無味殺風景なる學課を以て強て生
徒に課するの惡弊を惡むは勿論又其授業法の餘り規則に拘泥し徒に生
徒を苦め生徒の教師を視ること鬼頭若くは惡人の如くならしむるを惡
む者なり

氏の規則的の授業法を惡むは少しく極端に過ぐるの弊なきに非らずと
雖も然れども之をして興味ありて生徒の心情を誘發すべき者たらしめ
んと欲するの点は頗る道理に叶ひ非難すべき所なしとす氏は固より研
究と遊戲とを混ずるを願はざれども成るべく小兒を檢束することなく
亦嚴格なる學科を強課して之を厭はしめ爲めに呵責罵詈するが如き弊
害に陷ゐることなくして能く小兒をして其學ぶべき學科を學習せしめ
んことを願へりロック氏の最も遊戲的の法方を用ゆべしと勸告する所は

殊に讀書に在るなり曰く讀書を教ふるに當ては遊戲の際に之を學習せ
しめ其勞を減ぜざらしめざることを得べきなり

小兒は其年齢の如何に拘はらず自己の獨立を重じ快樂を得るに熱心する
者なりロック氏以前に在ては未だ氏の如く明瞭に小兒の自然に備ふる所
の活動力と自由權を重んずるの必要を承認せし者あらざるなり即ち其
獨立の氣象と其好尚とを重ずるの必要を主張せし者あらざるなり氏は
十七世紀にて此說を唱へたるが十九世紀に至り有名なる哲學者出でゝ
氏の意を嗣きたり即ちハーバアト スペンセル氏 是なりスペンセル氏は精
密に小兒の心意は獨り能く之に快樂を覺ふるは其天性の好尚と自然力
とに應合すべき活動力の啓發する時に在り而して眞正の教授は此活動
力を啓發すべき者に在て存するなり（原註小兒の學科を厭ふ所以は其學科
を教ふる方法の不可なる歟若くは其學科たるや小兒の心意未だ啓發せざるに前ちて之を課する歟の二者に出でゝ而し
て多くは其心意の未だ啓發せざるよ前ちて之を課するの事實にあり智力上の慾

情既に自ら開發して之を滿足するを待つと云ひ若くは智力上の情慾は心意の開發をるに從て自ら開發し來る者ありと云ふが如きは心理の原則と云ふべからざる所なり（智力上の情慾は自然に發達をることなきに非ずと雖ども多くは外より創造すべき者ありと云ふに非ず）

第二百十九、記臆に訴へて教授をるの可否

記臆力に訴へて敎授するの可否如何と云ふ疑問あり ロック氏は悉く之を不可なりとせり然れども其不可なりと爲す氏の斷定は大に謬るのみならず此斷定を形成する前提も亦大に謬れり ロック氏は其謬謬の心理說を基礎として記臆力なる者は決して進步すべき者にあらず決して練習に依て其力を增すべき者に非らずと斷言せり又記臆なる者は決して開發し成長すべき者に非らずと信じたり

氏の言に曰く小兒の記臆力を練習し及改進せしめんが爲には當さに之をして事物を暗記せしむべしとは余の耳にする所なり然れども余は此等の論は宜しく確實なる証據と實際の觀察とに依て立てられんことを

企望する者なり蓋し記臆力の强健なるは天稟に備る者にして練習に依て增長すべき者に非らず心意は物を把住するの力ありとは是れ誣ふべからざるの事實なれども是れ人力の致す所に非らずして其天性に備ふる所の把住力に依て然る者なり譬若くは鉛に施せる印象は黃銅若くは剛鐵の上に施せる印象の如く久しく持續せず時に新に之に印象を施す時は久しく持續するとを得べしと雖も其持續するは新に加へたる印象にて舊印象の存するに非らず今羅甸語を先づ暗記せしむる時は更に自餘の印象を把住するとと能はず恰も鉛板上に一たび一文章を彫刻するが如し時は更に其他の文字を彫刻するとと能はざるが如しと

若しロック氏の述ぶる所を眞なりと許す時は敎育は全く之を行ふとと能はず何となれば敎育なる者は其能力の如何なる種類に屬するを問はず其萌芽は必らず人心に存する者にして之を練習する時は必らず發達上

進すべき者なりと見做さゝるを得ざればなり

第二百二十、小兒をして職業の事に練習せしむべし＝ロック氏も蓼騷氏と同しく職業を練習せざるべからずと爲せり然れども其趣意に至ては全く相異なれりロック氏曰く余は貴人も亦職業卽ち眞正に手足を勞する職業の二三種を覺へ置て可なりと放言して毫も憚からざるなりと蓼騷氏も亦曰く余の汝に求むる所は才能にあらず乃ち眞正に腕力を勞する職業に在るなりロック氏の貴人に大工職若くは耕作を勸告するの趣意は全く蓼騷と異なりて此に依て其身體を使用して心意を慰め欝を散し且つ身躰をして運動せしむるに在り蓼騷氏の如きは全く然らずして其職業を練習せしむるの趣旨は若し反亂の時に際し不幸にして其貨財を失ふことあるも其職業を練習し居れば是れに依て其性命を維持するに必要なる資本を得

べければなり是を第一の趣旨となす第二には國民なる者は貴賤貧富を論せず皆職業に從事せざるべからず是れ社會上の義務なり若し職業に從事せず懶惰なる者は不良の人民と見做すなりと

第二百二十一、職工學校＝ロック民の意を用ひたる所は專ら專修の學科と貴人の敎育とに在りと雖も然れとも初等敎育の疑問に對して全く冷淡なる者に非らず千八百九十七年英國政府に献白して貧乏子弟の爲に職工學校を設立するの必要を說きたり三歲以上十四歲以下の兒童は其勞働と食物とを得べき處に集めて職工の業を習はしむるに在り氏は此の如き方法を立て以て兒童の不德に陷ゐるを制し及其貧究を救はんとせり且つ小兒の懶惰放蕩を矯正し其父母の負擔を輕減せんことを企てたり又此に依て善良なる習慣德性を養ひ以て確實にして勉强なる人物を出さんことを務めたり之を換言すれば下等人民を敎育して

社會の面目を一新せんことを務めたり故に氏を評して貴族の師傳にして又貧究者の敎育家と謂て可ならん

第二百二十二、ロック氏及婁騷氏＝婁騷氏の著せる「エミィル」を讀む時はロック氏の意見に基く所多きを見るなり而して婁騷氏は氏を稱して頴敏なる人なりと云へり若し吾人にして婁騷氏の「エミィル」を讀む時はロック氏の實際の意見に富み且其性質の平穩にして論定の確實なるを知るあと益明瞭なるべしロック氏は婁騷氏の華美なるが如くならずして平易に物を判斷し其意見を述べ已先づ明瞭に了解して後人をして之を會得せしめんことを企望せり今ロック氏の著せる敎育考案の價値を明に解得せんことを欲せば婁騷氏の「エミィル」を再三熟讀したる後に於て之を讀むべし其「エミィル」の華美にして情にはやり其論鋒の飛揚高超にして急激感憤の跡を見然して後眼を轉して敎育考案を讀下する時は其論鋒平易にして激せず偏せず確實にして興味あり論旨の素朴純正にして誇張浮虛の跡なきことを益明なるべし

第二百二十三、約解＝(一)敎育の目的と方法とは其立つる所の標準に依て定まる者なり或は宗敎的或は學問的或は社會的の如き是なり而して其標準とする所の相異なるに從て敎育上の所見も亦相異れり

(二)主觀的の思想はソクラチス哲學派より始り客觀的の思想は倍根の哲學派に原づく此思想の二大源より兩派の敎育家を出だせり一を虛禮派と云ひ一を實益派と云ふ虛禮派の目的とする所は敎訓練習若くは涵養を重んじ實益派は專ら敎指を主とす此兩派は第十七世紀に至て判然と分れマルブランチとロック兩氏の如きは兩派の代表者なり

(三)古文學に抗するの反動思想漸く顯れて敎授を以て一種の快樂なる者